
あたしの弟は魔王サマ！？

天原ちづる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしの弟は魔王-sama！？

【Z-コード】

Z8735B

【作者名】

天原ちづる

【あらすじ】

尾上千歳は大学一年生。徹夜で古典のレポートを仕上げていたはずなのに、垂直落下式スリルライド気分を味わって、たどり着いたのは陰気な地下室。そして目の前には、天使も裸足で逃げ出すくらいに可愛いお子様が。なんとこのお子様が、魔王陛下だと言うのです。魔王陛下の姉の生まれ変わりだと告げられた千歳は、果たして無事に日本に帰れるのか！？

ねえ、あなたは魔王って単語に、どんなイメージを持つてる？
強面のバケモノ？ カッコイイお兄さん？

それともナイスバディのお姉さまだったりする？

今ちまたでは異世界召喚モノって流行ってるから、いろんなタイプ
があつて一概には言えないとと思う。

けどさ、そういうのって大抵、異世界に跳ばされた人がなつたりす
るもんだよね？

なのにあたしの役割は魔王の姉だつていうんだよ。

夢にしても微妙な役柄だと思わない？

というか、そんなのんきに夢見て寝てる場合じゃないんだよ！

明日提出のレポートがまだ終わってないんだつてば！

これ落とすと単位もらえないから！

夢なら覚めてよ！ ヤバいんだつて、いや、マジで！

どうも皆様、こんばんは。昼間だつたらごめんなさい。

一人称小説ならではのお約束。自己紹介に入らせていただきます。
あたしの名前は尾上 千歳。

ギリギリ十代の大学二年生です。

専攻は日本文学。趣味がWEB小説漁りで、特技は毒舌。

性格は中学生時代の失恋から顕著になつたけど、割と偏屈だと言わ
れる。

偏屈なんて言葉、普通の女子大生には使われない表現だけど、自覚
もあるから無問題。

えーと、あと、どんなことを話せばいいのかね。

ああ、今あたしが置かれている状況か。

古典のレポートを仕上げるため、徹夜一日目でパソコンに向かつて
いたハズなのに、なんだか知らんが、いきなり開いた穴に落っこち

た。

気分はあれだ、遊園地にある高い塔の周りに座席があつて、落ちるヤツ。

垂直落下式スリルライド。

ただし座席も安全バーも「ございません」。

絶叫系が嫌いなあたしは、乗つたことなんてないけどね。

で、スポーツと飛び出した先に待つていたのは、豪華絢爛な大広間

……じゃなくて、なんだか陰氣でかび臭い、地下室のようなトロ。

ガサガサという不吉な音は、聞かなかつたことにしたいです。

ありえない状態に周りを見回してみると、五、六歳くらいのお子様と田が合つた。

ところがどつこい、このお子様はそんじょそこなうお子様じゃあなかつた。

とにかく可愛い。マジで可愛くて愛らしい。天使も裸足で逃げ出すべりこ。

こんな子が街中を歩いてたら、すぐに変態こじらわれやがつね。思わず連れ去っちゃうくらいに可愛いから。

そのお子様があたしを見て、にこりと本当に嬉しそうに笑つた。うわあ。反則でしょ！ その笑顔は。お姉さん鼻血出ちやうよ！

「姉上！」

はーい。

……じゃなかつた。

徹夜一日田の頭は、まともに回転なんぞしてくれません。

テンションがおかしいのは、きっとそのせい。

いつもはもつとクール……なハズ。

くらくらする頭で、そんなことをぐるぐる考えてたら、天使よりも可愛いお子様が、両手を広げて駆けてきた。

けれど徹夜一日田で垂直落下式スリルライドを生まれて初めて体験したあたしは、勢いよく飛びついてきたお子様を抱きとめることができず、見事に体勢を崩して後頭部を床に強打。

その中で筆の世界へ、ハイヤホウなり、した。

夢の中で夢を見るつてのも何か変だけど、あたしは夢を見た。

壮絶に可愛いお子様が「姉上、姉上」つてあたしの後をついてくる夢。

あたしもそのお子様を抱きしめたり、本を読んであげたり、とても可愛がつてた。

現実にも弟妹が一人ずついるけど、こんなに仲睦まじくはない。口を開けば喧嘩腰。あたしの毒舌が鍛えられたのは、きっとこのおかげだ。

まあ、別に仲が悪いってわけじゃないけど。

だから、まあ、夢だと思って恥ずかしいわけですよ。

こんなにラブ・ラブ？ な姉弟は。

ああ、起きなきやつて思う。

レポート、あと少しで終わるし、締め切りは午後三時だから、死ぬ氣でやれば何とか間に合つかも知れない。

あの教授、レポートだけで成績を判断するから、これをしくじると、今までマジメに講義に出席してたのが、骨折り損になるんだよね。それだけは避けたいわ。

ぱちっと畳を開けると、布が見えた。

何度も瞬きをして、どうやらそれが天蓋てんがいだと分かった。

天蓋付ベッドなんて、初めてだよ、あたし。

寝返りを何回打つても落ちなさそうなこのサイズ。

キングサイズつていうの？

シーツは清潔で真っ白だし、よく陽に当たのか、いい匂いがする。

ただし難点をいえば、枕が高すぎるのことかな？

あたし、佩ちゃんこの枕でしか、安眠できないんだよね。

部屋にはテレビで見た外国のお金持ちがコレクションしているようなアンティーク調の家具があつて、あたしの部屋のゆうに十倍はある

る広さだ。部屋の中で徒競走くらいできそう。

ふと、すーすーするなあと思つて自分の体を見てみると、家にいる時にいつも愛用している高校のジャージじゃなくて、真っ黒のノースリーブのワントピースを着ていた。

肌触りが最高に素晴らしい。これは絶対合成繊維なんかじゃない天然モノだろう。

えーと、ていうか、リー、ビー、ジー、

夢から目覚めたらまた夢でした、ってか?

おいおい。早く起きないと、ホントに単位落とすよ、あたし。こりや、気合を入れて起きねばね。

うーん、夢から目覚めるには、どうしたらいいのかねえ。

行儀は悪いけど、ベッドの上であぐらをかき、うんうん唸つてると、ドアがノックされた。

起きてるのに黙つてるのも何だし、返事した方がいいのかな?

「はい?」

「姉上、起きた?」

ガチャリとドアノブが回つて顔を出したのは、あの天使の上を行く可愛さのお子様だった。

その後ろには、眉間にくつきりシワを刻んだお兄さん。

折角の美形なのに、その不機嫌な顔で五割は損してる。

そういうのがいいってご婦人もいるんだろうけど、あたしは嫌だな。こっちまで気分が沈みそうな表情かおだ。

「姉上?」

とててててと犯罪的可憐さのお子様が、ベッドの側に駆け寄つてくれる。

う、走り方まで可愛らしい。

つていうか、えらくリアルな夢だな。こんなにリアルな夢は初めて見たよ。

いつも変な夢ばっかし見るもんな。

ゾンビ犬に追いかけられたり、サメに襲われたり、ギー一特戦隊がマンションの上に出現したり。

「あ～、あれか？ いくら若いからと言ひて、徹夜はやつぱし駄目だつたか」

昔から徹夜つて苦手なんだよね。

「姉上？」

「睡眠つて大事だよね。何せ人間の三大欲求の内の一つだしちなみに後の二つは食欲と性欲だ。

「姉上！」

「早く起きてレポート書かなきや」

たつぱり寝た後のように頭がスッキリしてゐるから、きっとはかどることだろつ。

「姉上つてば！」

「は？」

夢つて触覚あつたつけ？ 確か痛覚はないんだよね？

天使も裸足で以下略なお子様が、ぎゅっとしがみついてくる。

不満気に口を尖らせて、あたしを上目遣いに睨む。

可愛い子つてどんな表情をしてても可愛いといつことを、この口学びました。

「さつきから姉上は独り言ばかり言つて。僕の話は聞いてくれないの？」

「は？ え～と、あの、さつきから姉上、姉上つて言ひけども、あたしにこんな可愛らしい弟はいないハズなんだけど……」

あまり可愛いない弟と妹ならいるけどね。

あたしがそう言つと、天使も以下略なお子様は首を横に振つた。

「ううん。姉上は僕の姉上だよ。ちゃんと分かるもの。キュレオリア姉上の魂だ」

「あのさ、あたし、キュレなんたらとかいう名前じゃないんだけど」

「尾上 千歳つていう、立派な名前があるんですけど。

やつぱり夢だね、展開がワケわかんないし。

「そんなことないよ！ 僕が姉上の魂を間違えるなんてあり得ないもの！」

天使以下略お子様がやつぱりと言いつ切った。

大した自信だな、オイ。

ぎゅっと天以下略お子様にしがみつかれるのは悪い気はしないけど、今は夢なんて見てる場合じゃないんだよね。

こうこういふ夢は、もつと余裕のある時に見たいもんだわ。

姉上だ。

いや違う。

ところ不毛な論争に終止符を打つたのは、お子様の後ろに背後靈よろしく張り付いていた、不機嫌そうな美形の兄さんの一言だつた。

「陛下。そもそも執務に戻られませんと。今日中に裁可願いたい懸案がいくつもござります故」

「えー！ もう少しいいでしょ？ ジュトー。折角姉上と再会でき

たのるもの」

おー、兄さんの顔は好みじゃないけど、声はものすごく好みだわ。つて、陛下？ このお子様が？

ぎゅうっと首にしがみついてくるお子様と、ジュトーと呼ばれた兄さんを交互に見て、その素直な感想を口に出す。

「はあ？ 陛下ってこんな小さこ子が？」

しかも王座に座っているだけじゃなくて、なにやらこのお子様が政務をしてるような口ぶりなんですけど？

不機嫌な顔の兄さんは、あたしをジロリと睨みつけた。

「魔王陛下は御歳百六十歳であらせられる」

は？

すいません。あたし今、信じられないことを一つ聞きました。

まずはこの天使も裸足で逃げ出す犯罪的可憐なお子様が、実は魔王陛下であるということ。

もう一つは、どう見ても五、六歳くらいにしか見えないこのお子様が、御歳百六十歳だということ。

おーおいおい。こへら夢でも無茶な設定だろ？ や、そつや。

夢つて自分の記憶を整理するために見るつていうけど、こつやないでしょ。

「夢なんかじやないつてばー！」

はいはい。

夢の住人って、必ず否定するんだよね。お約束。

あ、そういうえば夢の中でもた寝ると、起きられるんだつけ。
それに思い至ったあたしは、豪華天蓋付ベッドに横になつた。
目をつぶつてブランケットを頭まで被る。

お休みなさい。

つて、痛エ！ 重つ！

「ぐえつ」

ついつい女子大生にあるまじき声を出しちゃつたよ。
頭を出すると、魔王陛下があたしのお腹の上に、ていつと腹這いになつていた。

丁度あたしと陛下で+の形になる感じ。

あの、重いんですけど……。

「もう！ 姉上、無視しないでよ！ 折角また会えたのに。僕、姉
上に会える日をずっと待つてたんだよ？」

魔王陛下はふんすか怒つていらっしゃいますが、この際、そんなこと
はどうでもいいです。

重要なのは、痛覚を感じたこと。

もしかして、いやにリアルなのは、現実なせいですか？
ホントにリアルだつたりするんですか？

「うつそ！ マジで！」

今更ながら慌てて自分のほっぺたをつねる。

「いひやい」

「うわあ……。

ガツクリと肩を落としているあたしに追い討ちをかけるかのよひに、
不機嫌な声が降ってきた。

「馬鹿が」

その言葉はあたしの心にクリティカルヒット。
もう駄目です。HPゼロだわ。

がつくしくるけどね、ここにヘタれてる場合じゃないし。

沈んだら沈んだだけ、浮上しないと。

さつやと帰らせてくんないかな。

このまま一生帰れないパターンと、行ったり来たりするパターン。

あたしの場合はどうちだろ?

つーか、マジで帰りたいんですけど。

「えーと、陛下。いくつか質問があるんですけど、よひじこでしようか?」

実年齢が百六十歳だという魔王陛下に、ついつい敬語になつりやつ。はたから見たら五、六歳のお子様に敬語使つのは、変に見えるかな。ああ、どうせ偉い人だから、敬語でも問題ないか。

「うん、いいよ姉上。でも僕のこと、ちやんと名前で呼んでくれたらね」

え? 魔王陛下の名前なんて知らないんですけど……。

無茶言つな。このお子様が。

お願いします。そんなキラキラした期待の目で見ないでください。心中で謝つたり怒つたり、まあちよつと混乱中。

なかなか答えないあたしに陛下はちよつと不満気だ。

「姉上、もしかして僕の名前、忘れちゃったの?」

「忘れるも何も、初対面なんですが」

こんな可愛いお子様に一度でも会つてたら、絶対忘れないって、普通。

「むう。ホントに? 覚えてないの?」

うわっ、今度はうるうるですか!?

止めてよー。まるであたしが泣かしたみたいじゃん!。

どうしちゃー。ウチのチビ共が泣いてたら、泣き止むまでまつたらかしどくけど、さすがにこんな可愛いお子様を、ほつとくわけにもいかないよねえ?

これがもし街中だったら、あたしに非難轟々だよ。

まるで犯罪者を見るような目つきで見られちゃうつて!

あのー、つていうか、陛下、ホントに百六十歳ですか！
百六十歳つて、もつと老成してもいいじゃないんですか！

何で「こんな」とか泣くのよー！

ああっ、もつー！

抱きしめて慰めればいいんだか、そんなことしたら失礼なのか判断つかないよ、あたしには。
はあ。

「あの、陛下？」

「ここに？」

ずびびびーと鼻をすすつて顔を上げる魔王陛下。

ヤバッ、何ですか！ その返事はー！

あたしに鼻血出させたいんですか！

心の中の葛藤を見事に押し殺すことに成功したあたしは、表面上は
平静な態度で尋ねた。

「陛下、あたしは陛下のお名前を知っているはずなんですか？」

「うん」

「どうしてですか？」

「僕の姉上だから」

堂々通りだな、オイ。

まあ、とうあえず泣き止んだみたいだし、氣をそらす作戦成功。そして助け舟は、意外な方向から現れた。

ジユトーの兄さんだ。

これ以上無駄な堂々巡りさせて、執務に影響出るのを嫌つたに三千点。

「陛下、この娘はキュレオリア様の生まれ変わりでしょうが、キュレオリア様ご本人ではありません。陛下の御名を存じないのも、無理はなかろうかと」

生まれ変わりって、輪廻転生だよねえ。

だから魂がどうのこうのって言つてたのか。

全部信じるワケじやないけど、これが夢じやないのは確かだ。

だつて痛かったし。

魔王陛下はちよつと考える様子を見せて、コクリと頷く。

「うん、そうだね。僕ちよつと興奮し過ぎちゃったみたい」

陛下はあたしの手をぎゅっと握つて言つた。

「姉上、僕の名前はビュレフォース。ビュートて呼んでね

「あ、どうも。尾上 千歳です」

つられて名乗る。

「じつちがジユトール＝フェイ。僕の補佐をしてくれている宰相なの。ジユトー、ご挨拶は？」

魔王陛下に言われて、不機嫌そうな顔はそのままに、ジユトーの兄さんが一礼する。

流れるような綺麗なお辞儀を、あたしは生まれて初めてみたかも知んない。

現代日本では滅多にお目にかかれないので、

「王姉殿下におかれましては」機嫌麗しく、尊顔拝し奉り、恐悦至極にござります」

雄牛？ ああ、王の姉で王姉ね。

あの、ぜんつぜん「機嫌麗しくなんてないんですけど。
むしろそんな馬鹿丁寧な挨拶をされたことなんてないから、ムズか
ゆくてしょうがない。

「あ、『丁寧にどうも』」

なんてマヌケな返事しか出来なかつたし。
つていうか、普通「」でどうせひつて返すかなんて、知るわけないじ
やん。

あれか？ 苦しそうなことか言つかけやつのか？

「あの、で、陛下」

「ビユーダつてば」

「……ビユーリ様」

「ビユーリて呼んでよー。」

「陛下、帰らしてください」

「ヤダ」

ヤダつてナニー！？ ヤダつて！

「とにかく帰りたいんです。絶対落とせないレポートの締め切りが
あたしを待つてるんです」

「そんなこと知らないもの」

このガキ！

という言葉は、からうじて飲み込んだ。

なんせ御歳百六十歳の魔王陛下に、ギリギリ十代のあたしが投げか
ける言葉じゃない。

それに陛下の後ろに控えてる兄さんがギロリと睨んできてるし。
でもさ、いきなり連れてこられて帰せないって何様？
つて、魔王サマだつた……。

こんな天使みたいなナリしても、魔王サマに違いないってか？
ふざけんじやねえよ。

「とにかく、あたしの前世が陛下の姉であろうが、
関係ありません。今のあたしは尾上 千歳っていう人間です。元の

世界に戻してください』

見かけに騙されちゃいけない人つているよね。

まあ、ヒトじゃなくて魔族だけど。

『ダメ、帰らせない。帰っちゃダメだよ』

陛下がぎゅっとあたしの手首を掴んでくる。

そのあまりの力の強さに、思わず顔をしかめる。

『いたたたたた！ あの！ マジで痛いんですけどー』

見かけは五、六歳だけど、結構力があるらしい。

あたしが叫ぶと、陛下はぱっと手を離した。

あーあ、手首に真っ赤な手の跡がついてる。まさか骨に異常はないだろうな。

そつ思つてくいくいと曲げてみるけど、たいした痛みはない。
どうやら異常ないみたいだ。

『姉上、ごめんなさい。大丈夫？』

しょんぼりした顔で素直に謝られいや、強く怒れないのは、まあ、
しかたないよね。

反省してるようだしさ。

『じゃあ、帰してくれます？』

『それはダメ』

前言撤回。素直だからって、すべてが許せるもんじゃないな、うん。

『陛下』

ジユトーの兄さんの不機嫌な声が響く。

別に大声出してるわけじゃないんだけど、声が響く人つている。
そしてどうやら、この不機嫌な声がデフォルトらしい。

幾分かは機嫌のせいだろうけど。

たつたその一言で、魔王陛下は全てを察したらしい。
ちなみにこれはあたしにも分かった。

つまり『仕事しろよ、コルア。決裁待ちの書類が山ほどあるもつて
てんだろ』てことでしょ？

多分、言葉遣いはもっと丁寧なんだろうけど。

陛下は渋々ベッドから降りて、言った。

「とにかく、姉上は僕の姉上に間違いないからね。勝手に帰っちゃダメだよ?」

「ちょっと待て、勝手はどっちだよ。

つていうか、帰り方なんか分かんないし。

「でも異なる世界をつなぐ技は、僕しか出来ないけどね」

「だったら言つなよ!」

「帰らしていくださー、マジでお願いします!」

「じゃ、また来るね」

「ちょっと、陛下ー!」

あたしの、待つてください、つてこう言葉も聞かずに、陛下はとてててと走つて出て行つた。

恐ろしく自己中だな、オイ。

我侭放題のガキなんて大嫌いだ。

その我侭陛下の後をジユトーの兄さんが追つ。

こつちは流石に走つたりしない。長いコンパスですたすたと歩いて行く。

そしてドアの所で、こつちに振り向いて言つた。

「ここあなたは望む望まざしに関わらず、王姉殿下として扱われる。その自覚を持ち、決して陛下の邪魔をしないよ!」、胆に銘じておくんだな」

「ちょっと、それどういう意味ですか!」

あたしの問いかけを無視し、言いたいことだけ言つて、不機嫌兄さんはさつさと部屋を出て行きやがりました。

何さ、無視することないじゃん！

あたしは頭にきて、追いかけて行つて文句をつけてやるのと思つてベッドを降りた。

無駄に広い部屋を横断して、ドアノブに手をかけたけど、動かない。くそっ！ 鍵かけやがったな！

ん？ でもドアノブって、普通鍵をかけても少しくらいは動くよね？ びくともしないし、鍵穴も見当たんないつてことは、もしかして魔法とか？

「ふつざけんな！ あたしがどんな苦労してあの大学入ったと思つてんだよ！ 灰色の受験生活を終えてやっと薔薇色のキャンパスライフと思いきや、毎日の講義は大変だし！ レポートはたくさんあるし！ 試験だつて大変なんだぞ！ やつとの思いで一年過ごして、一年目突入してんだよ！ こんなことで退学になつてたまるか！ 今までの苦労を無駄にせんじゃねえよ！」

只今、当人比1.5倍で口が悪くなつております。『了承ください。厚そうな立派な木製のドアをどんどんと叩いたけど、誰も来やしない。

おまけで蹴り飛ばしたけど、裸足だつてこと、忘れてたヨー。めっちゃ痛え！

つま先を抱えてのた打ち回つてる様は、きっと傍から見たら馬鹿みたいなんだろうな。

けどさ、実際に当事者になつてさらんなさいよ。落ち着いた行動なんぞ、出来やしないつて。

大体さあ、こいつのつて、一人くらいは協力者がいるもんじゃないの？

いきなり異世界に連れ去られちゃつたのを理解してくれる人がさ。あたしは出来ればカツコイイ兄さんがいいな。

ジユトーの兄さんみたいな不機嫌な面したんじゃなくて、もっと爽やか系でさ。

はあ、何だか虚しくなっちゃったな。

とりあえず、現状把握、行つてみますか。

そういうえば肩丸出しだし。

なんか羽織るものないかな？

あと、靴ね。

あたしは壁際に並んでる豪華で品があつて絶対年代モンつて一目で分かるタンスを端から開けてぐ。

中にはドレスがびつしり詰まつてた。

綺麗なドレスを見れば、ちょっと体に当ててみたくなるのが乙女口コロつてヤツでしう。

タンスの扉の内側についてる大きな鏡に、姿を映してみた。

「……似合わね」

なんていうかさ、まずサイズから違うんだよ。癪なことに、胸はあまつて腹はキツイ感じ。

別にあたしがそんなにペチャパイつてワケじやないよ？ 言つとくけど。

このドレスの主が良すぎるんだつて、体型。絶対DかE以上あるよ。グラビアモデル並み、まではいかないか。

これまでならコルセットでも閉めんのか、つて一応納得はできるけど、色もさ、微妙に合わないんだな、これが。

あたしはファッションセンス、そんなに良くないから、詳しくは分かんないけど、自分に似合うか似合わないかくらいは分かるつもり。あたしがこここの衣装じゃなくて、黒のワンピース着せられてるワケが分かつたわ。

シンプルなデザインはあたし好みなんだけどなあ。

でもこれを見たら、どんな馬鹿にだつて分かるでしょ。

これはあたしのじや、尾上 千歳のじやない。

オレ……じゃなかつた、えーと、キュレ……そひ、キュレオリアの
だ。

きつとこのドレスだけじゃなくて、この部屋 자체がキュレオリアの
部屋だつたんだと思う。

なんだか、拒絕された気分だ。

ここはあたしがいるべき場所じゃないつて、この部屋全体が言つて
るみたい。

あたしだつて好き好んでいるわけじゃないのに……。
はあ。

ため息を一つついて、手に持つてたドレスを元に戻した。

他のヤツ、試す氣にもなんないよ。

あたしはガサゴソとタンスの中身を漁つて、ショールと靴を発掘し
た。

靴は何とかサイズが合つた。

シンデレラみたいにぴつたりつてことはないけど、キツくないし、
脱げもしない。

まあ、これなら大丈夫でしょ。

ヒールも高くないから、多少は走れそう。
幅広のショールを羽織つて、準備はOK。
大きな窓の側に行く。

外はテラスになつてゐるみたいだ。

こつちも鍵だか魔法だかがかけられてるかも知んないなあと思いつ
つ近づくと、どうやら普通の鍵だけしかかつてないみたいだ。
うん、ラッキー。

さつそく鍵を外して、テラスに出た。

「うへつ！？」

テラスの手すりにしがみついて下を見れば、手入れの行き届いた綺
麗な庭。

どうやらこじは一階みたいだ。

けど天井が高いらしいので、実質的には大体三階くらいの高さにあ

る。

でもあたしが驚いたのは、その先だ。

心のどつかじや、これがドックリって可能性も捨てきれてなかつたんだよね。

だつてさ、いきなり異世界だの、魔王陛下だの、魔法だのって信じられるわけないじゃん。

百六十歳のお子様だつて、担がれてるつて思つのが普通でしょ？ あいにくと、あたしこれでも現実主義者なもんでね。

メルヘンの世界はとつくに卒業してゐるし。

でもこれ見たら、信じないわけにはいかない。ずるずると体の力が抜けてく。

多分これが世に言つ、腰が抜けたつて状態だ。ぺたんとテラスに座りこんだあたし。

今日は初めて、づくしだわー（棒読み）。

尾上 千歳、ギリギリ未成年の主張。色々な憤りをこめて、叫びます。

「うつそつでしょー！」

遙か下の方に見える地面。

これはあれだ、まあ、なんていつか、魔王の動く城？ いや、むしろラピュカ。

流石に上空は肌寒くて、あたしはショールをかき寄せた。で、座り込んだまま、もう一度現状整理。

その一、ここはあたしの生まれた世界じゃございません。

その二、べらぼうに可愛い外見五歳児の自己中魔王陛下は御歳百六十年。

その三、あたしはその魔王陛下の姉の生まれ変わりだそうです。

その四、宰相閣下は不機嫌な面した美形の兄ちゃん。

その五、あたしが今いるのは天空の城。

以上。

くそつ、ほんと無きに等しくないですか！

全ツ然質問できなかつたもんなあ。

どうしようつか。

こんな時なのに浮かんできたのはレポートのことだった。空を仰げば真っ青な空が広がつてた。

完璧に夜が明けてる。むしろ太陽の位置からすると、お風過をへりい。

ちなみに締め切りは午後二時。

でも、今からじゃ無理。完璧落とした。

うう、あんなに頑張つたのに！ あと二三百字ちょっととだつたのに…。
徹夜までしたのに！

「なんでだコンチクショー！」

はあはあ。

思いつきり叫んだら、少しほすつきりした。
でもやつぱり悔しい。

けなげに頑張つてるあたしに、神様はなんて無情なんでしょうね。
あれか？ 正月くらいしか詣でないからか？
ちつ、器量狭いな！

「ねえ、君。やつを叫んでたよね？」

ぶつぶつと呪詛の言葉を吐いてると、いきなり声をかけられた。

「こ」は一階、よって下を見る。

「おおー、理想を絵に描いたような爽やか系兄さんがいるじゃありますせんか！」

「前言撤回！ 神様ありがとうございます！」

「でもアレ聞かれたのは恥ずかしいぞ！ チクショウ！」

「そ、そうですけど……何か？」

「いや、ちょっと気になつたものだからね」

庭とテラスで会話。

「ロミオとジユリエットみたいだなあ。」

「ああロミオ様、ロミオ様、どうしてあなたはロミオなの？ つて、まだ名前も聞いてないけどね。」

「聞き苦しいことをお聞かせしまして……」

「気にすることはないよ。多分俺以外は聞こえてないだろ？」「はあ、そうですか？」

いや、あなたに聞かれたこと自体、相当恥ずかしいんですけど。その間を警戒してると思ったのか、爽やか系兄さんが自己紹介してきた。

「ああ、そうだ。まだ名乗つてもいなかつたね。俺は表の十将軍が一人、ミハイル＝ピロツツ」

「あ、どうも始めてまして。尾上 千歳と言います」

「オノエ？ 変わった名前だね」

「いえ、尾上は苗字で、千歳が名前です」

「じゃあ、チトセって呼んでもいいかな？」

「えつ、あ、どうぞどうぞ」

ヤバッ、ここ最近、男の人に下の名前で呼ばれたことなんてなかつたから、無駄に緊張しちゃよ。

しかもカツコイイ爽やか系の兄さんにだよ？

まあ、多少声が裏返つたのは、「こ」愛嬌と言うヤツで。

「チトセ、そことこで話すのもなんだから、降りて来ない？」
ピロツツ将軍の言つことは、至極もつともなことに聞こえるけど、正直あたしは迷つた。

確かに三階相当の一階のテラスと庭との会話は、声を張り上げなきやいけないし、めんどい。

けどさあ、あたしにも危機管理能力くらいはあるんですよ、一応。ここで顔がイイつてだけでホイホイついてくよつた尻軽じやないつもりなんで。

それに将軍つて名乗つてゐるけど、それが本當かどうか、判断できないし。

人を純粹に信じられる年頃でもないんだよね、もつ。大分スレちゃつてるからさ。

「俺のことが信用できない？」

ええ、その通りです。

なんて、正直に言えるか！

ここはあれだ。一応困つたような顔をして、否定しどべきだろう。うん、早速実行。

「いえ、そんなことは……」

「大丈夫だよ。将軍の名譽にかけて女性を手荒に扱つたりはしないから」

う、その爽やかな笑顔が眩しい！

ここで拒んだら、なんだか悪い気がしてきちゃうね。

こりや、女性の扱いに慣れてるつて、絶対。

しかも年上年下同い年、全てにモテるに違いない。

う～む、このチャンスを逃すと、情報を得ることが難しくなるかも知んないなあ。

さて、どうするか。

あつ、その前にこの部屋、ドアに鍵だかがかかるから開かないんだっけ？

降りてくる、普通に無理じやん！

困ったなあ。

まさか脱出劇さながら、カーテン千切つて結んで縄にするわけにもいくまい。

つていうか、こんなに高価そうなカーテンを引き千切るなんて恐ろしいこと、貧乏性小市民のあたしには無理。考えるだけで恐ろしいわ。

だからあたしはその旨を将軍に告げた。

閉じ込められた、貧乏性うんぬんは抜かしてね。

「あの、ピロツツ将軍。お申し出は嬉しいんですけど、降りられないんです」

「大丈夫だよ。飛び降りればいい」

あのお？ すみません、将軍。

あたし、普通の人間なんで、三階の高さから飛び降りたら普通に死ぬんですけど？

飛び降りはぐちゃぐちゃするんで、勘弁してください。

「無理です」

「大丈夫だつて。ちゃんと受け止めてあげるから」

いや、無理でしょ。

落下速度とか重力とかの関係上、三階から飛び降りた人間を受け止めることが出来ないハズ。

マットやネットでもあれば話は別だらうけどさ、生憎そんなものは見当たらないしねえ。

ここに重力が地球に比べて軽いとは思えない。

よつて飛び降りたら、将軍もろともつぶれるのが闇の山つてトコでしょ。

すんません、あたし、死ぬときは畳の上で大往生つて決めてんですよ。

転落死なんでもうひの他。だつてぐちゃぐちゃなんてヤだし。

なのに将軍は両手を広げて、あおいでポーズでスタンバイ中。あの自信はどうから来んの？

二階の欄から飛び降りるのは、かなりの勇気が必要だと田嶋つんだよね。

でも、なんだかこの人なら大丈夫な気がしてさりやつたよ。

このままじつとしても、事態が進むとは思えないしね。

おっしゃー！ こじで怯んだら女が廢るわ！

いつかよやつたひつじやないのー！

あたしがしつとトーラスの手すりに手をかけて、自分の体を手すりの上に持ち上げた。

「いやーー！」

そしてそのまま田嶋へと華麗に（ こじに重複）ダイブしたのでした。

まあ、自分でも何が起こったんだか、よく分かんないんだけど、とにかくあたしは無事、地面に着地することが出来た。やっぱり怖くて落卜中、目つぶっちゃったんだけど、何の衝撃もなくて目を開けたら、ピロツツ将軍の爽やかな笑顔が、ビアップになりました。

いやあ、近くでも見てもガツカリしない男の人って、なかなかないもんだと思うんだよね。

何か魔族つて美形率高いっぽい。

つて、まだ魔王陛下と宰相閣下と将軍殿の三人しか知らんけどさ。たまたま美形にばつか遭遇してるんだとしたら、あたし大分運使つてんな。

ああ、こつち連れてこられたこと自体が運悪いんだから、プライマイゼロか。

ひょいと将軍に下ろしてもらつて、お礼を言つ。

「有難うござります、ピロツツ将軍」

「どういたしまして、チトセ。でも将軍は他人行儀だし、ミハイルでいいよ」

「え」と、善処します」

なんか政治家のへタな言い訳みたいだけど、年上の人を呼び捨て出来るほど、あたしアメリカナイズされてないもんと、心の中では将軍つて呼び続けます。すんません。

こうして同じ地面で向き合つと、将軍は結構背が高かつた。百八十近くあるんじゃないかな。

ああ、でもジユトーの兄さんが高そうだな。

あの兄さんバカでかかつたし。多分百九十はあるよ、ありや。威圧感ありまくつてたからね。

うんうん。それに比べて将軍は丁度いいサイズだわ。

やつぱり高けりや いいつてモンでもないつしょ、背丈つて。
将軍が落ち着いて話せる四阿あずまやがあるというので、案内してもひつこ
とにした。

その道すがら、将軍はズバリと尋ねてきた。

「異世界から連れてこられたつて、本当っ？」

「あの、何でご存知なんですか？」

「城はもうこの噂で持ちきりだからね」

あたしが連れてこられたのは、多分昨日か今日あたりだと思つんだ
けど、情報が早いな、オイ。まあ、噂つてそんなモンだけど。

「そなんですか？」

「うん。だから一足先に一目見たくて、あそこまで行つたんだ」
偶然じやなかつたのか。

そうだよねえ、そうそつ都合のいいことあるワケないし。

「でもびつくりしたよ。叫び声が聞こえた時はね」

「すいません。それは忘れてください……」

将軍、お願ひですから、思い出し笑いとかしないでくださいよ！
よりもよつてこんなカツコイイ人に聞かれるとは、余計に恥ずか
しいつたらないな、くそ！

その後、将軍から得た情報によると、この国の住人はやつぱり大抵
が魔族で、将軍自身もそつらしに。

魔族つていうのは、その身に宿した魔力が大きければ大きいほど、
歳をとるのが遅くなるんだそうな。

あの外見五歳児の百六十歳の陛下は、そついた理屈で成り立つら
しい。

あ、でも精神年齢は外見に比例するんだつて。
能力なんかはまた別らしいけど。

「じゃあ、やつぱり陛下は歳をとるのは遅い方なんですか？」

「の方はかなり特別だよ。何せ俺は今、百八十四歳でこの外見だ
からね」

あたしの田代には、將軍は「十代半ばくらいにしか見えないんですけどね。

なんかもう、自分がスゴイひよっこに思えてくるわ。

あっちの世界でもひよっこに違はないけどさ。

「あの、普通の二十歳前後の入って、どのくらいの外見なんですか？」

「うーん、二十歳くらいだと、三分、陸下くらいにか、ちょっと上くらいじゃないかな？」

つまりあたしつて、スゴく老けて見えてるつてことですか、そうですか。こっちの人、つていうか魔族には、あたしつて何歳くらいに見えてんだろう。

……聞くの怖いから、やつぱり止めとこ、うん。

將軍に案内された四阿は、周りから浮いてるわけではなく、埋もれてもない、絶好の趣がある所だった。

キチンと手入れもしてあるし、いいトコだわ。

「気に入つた？」

「はい」

「それは良かつた」

にっこりと笑う將軍の笑顔が眩しく見えるわ。

爽やかで癒されるもん。

ついついあたしも笑い返しちゃつ。

「あ～ね～う～え～！」

ぐはっ。

うう、いきなり腰にタックルがまされて無事に済むのは、レスリング選手ぐらいだってコトを分かってください、陸下。

つていうか、気配なかつたんですけど！

「あれほど勝手な行いを慎むよう、申し上げたはずですが？」

ジユトーの兄さんの低い声が、遙か頭上から降ってきた。

あはは、座つてると更に威圧を感じますねえ、オマケに逆光つス

か？

ヤバッ、怖！

魔王陛下の手が回された腰もかなり痛いんですけど、恐怖つて点じ
や兄さんが上。

でもねえ、それで素直に「メンナサイできるほど、あたし、可愛い
女じゃないし、人間も出来てないんだよね。

だからにっこり極上の笑顔を浮かべて言つてやる。

「あら、申し訳ございません。何せ右も左も分からぬ世界にいき
なりつれてこられて、何も知らされずに閉じ込められたものですから、
自分が置かれている状況の把握に努めようと思うことは、至極
当然のコトだと思いますし、あたしはそれを実行に移したまでです
けど、もし仮に事前に説明してくださっていたら、納得するしない
は別にしましても、このような無茶はしなかったことだと思いますわ、

閣下」

つまりは『てめえらが説明しないのが悪いんじゃねつが、ボケ』つ
てコト。

さつきはこきなりワケ分からん」とばかり言われてたから、一方的に
言われっぱなしだつたけど、普段のあたしがそれに甘んじると思
つたら大間違いだ。

いべりオブラーートに包んだって、言葉の端々のトゲに気づかないのは、よっぽどのにぶちんだけでしょう。

案の定、ジューターの兄さんの周りの空気が一、一度下がった。

眉間のしわも更に深まる。

気圧されそうになるけど、ここに退いたら負けだ。

そしたらあたしはもう、言いなりになるしかなくなつぢやひだらつ。そんなのは絶対にゴメンだ。

あたしは浮かべていた笑みを消して、勝負をかけた。

「あたしは黙つて言つこと聞くよくな、お人形さんぢやありませんから」

これはジューターの兄さんだけに向けて言つたんじゃない。

人の腰にへばりついたままの陛下にも向けて言つたつもり。

あたしは魔族じやないし、ましてや魔王の姉でも、キュレオリアつて人なんかぢやない。

人の都合も考へないヤツに言つこと聞けつて言われて、はい、そうですか。

なんんで、言えるワケねえつーの。ふざけんな。

「姉上？」

あたしの声の硬さに気づいたのか、陛下が顔を上げる。

不安気な顔だけど、あたしはもつ、それにほだされたりしない。きつぱりと言い切る。

「あたしはキュレオリアなんかぢやありません」

「違うよー。姉上は姉上だよー。僕には分かるもの。魂で分かるの！」

ぎゅつとしがみついてくる陛下をひつペがす。

陛下が求めてるのは、キュレオリア姉上でしかないってことは、はなつから分かつてた。

でもや、ここまで“あたし”を否定されたら、腹立たしいつたらな
まるであたしの存在意義がないみたいじやん。

「姉上……」

伸ばされた手をぴしゃりとはねのける。
もう我慢の限界だ。

元々あたしはそんなに気の長い方じやない。

「だからあたしは尾上千歳だつて言つてるでしょ。前世だとか魂だ
とか、そんなの知つたこつちやない。もうアンタの姉上でもなんで
もないんだ、さつせと元の世界に返して」

敬語なんてもう使わない。敬語を使ってやる価値もない。

巨大な力を持ったのがこんなお子様だから、余計に始末が悪いんだ。
この国の人同情するね。

どんなに実務能力が高かろうが魔力が強かろうが可愛らしかろうが、
中身がこれじや、一国の君主として失格だ。
自分のことしか考えられないよつなクズ、あたしだつたらさつせと
見限つてる。

「早く返せ、自己中」

もう爽やか將軍の前だと、不機嫌兄さんの前だと、どうでもい
いよ。

あたしは帰るんだから。

陛下もこれで優しい姉上はどこにもいなつて思い知つたでしょ。

「……もん」
「はあ？」

陛下が小さな声で呟いた。

あまりにも小さくて、全ツ然聞き取れなかつたけどな。

「姉上はいるもん」

「いるかよ」

ここにいるのは尾上千歳だつて、何回言つたら理解するんだ？ こ
のお子様は。

「こるつたら、こるんだもん！」

「いねえつつたら、いねえんだよ」

「姉上はいるつ！」

ぐふつ！

陛下が叫んだと同時に、腹の奥だか胸の下だか辺りから激痛が走った。

それが段々全身に広がつていって、痛みに耐え切れずに倒れる。

「チトセ！」

將軍の声が聞こえた気がするけど、よく分かんない。

あまりの痛さと熱さに、体を丸めて胎児のような格好になる。

くそつ、何だこりや！

ハラワタを鍋につつこまれて、ぐるぐるとかき混ぜられてる気分だ。つまりは最低。

こんな痛み、今まで味わったこともない。

頭のてつぺんから足の爪先まで、体中がビリビリする。

涙や油汗は流れるし、息もまともに吸えない。

「つうづつ

とにかく苦しい。痛いと叫ぶことも出来ず、ただうめく。

あたしには何時間にも感じられたこの拷問のような時間も、実際には数十秒くらいだつたらしい。

始まった時は逆の順序で、体が徐々に楽になつた。

息が吸えるつて、こんなに素晴らしいことだつたんだ。

大きく深呼吸して、そう思つた。

「キューレ……オリア……様……？」

だからあたしは違つんだつて、と言おつとして、あたしは凍ついた。

体を起こした拍子に“長い黒髪”が頬にかかつたからだ。

あたしの髪は、軽く明るくした茶髪だ。

それに長さだつて肩にかかるくらいだつた。

なのに今は大分長い。多分立つたら膝裏くらいまでなるんじやなかろうか。

信じられない思いで、自分の手を見る。

違つ！ これはあたしの手じゃない！

あたしはこんなに色白じやないし、こんなすつとした指じやない！

「なつ」

思わずこぼれた声に凍りつく。

今のはあたしの声？

声まで違つ……。

この体は“あたし”じゃない。尾上千歳つて人間じゃない……。

「なんじやこりやー！…」

ばしゅん！

叫んだ途端に、衝撃波出しちゃいましたよ！

二度びっくりだ！

髪の毛はざわざわするし、樹も風もないのにうねりはじめてる。

なんつーか、こう、ほとばしる熱いパトス？

いや、それは違うか。

思い出は裏切るかもしないけど。

「な、な、な、な」

髪の毛押さえてるのに、何でうねうね動くの…

怖！ メテコーサもびっくりだ！

「落ち着け！」

ジユトーの兄さんがあたしを抑えようとする、が、だが、しかし、然れども！

「こんな状態で落ち着いてられつかあ！」

ばしゃん！

うおっ、落ちてきた葉っぱが吹っ飛んだよ！

まるで一流の剣士が出した闘氣で破裂したかのようだな！

某赤毛で背の低い類に十字傷のあるお侍さんが活躍する漫画でこんなシーン見たよ！

「ちつ、魔力の制御が利いていないな」

「はあ？ 魔力？」

「そうだ。ピロッソ将軍、結界を。これ以上被害を広げぬために」

「あ、ああ」

爽やか将軍が何事か呟くと、多面球の結界みたいなのが広がった。マア、コレガ魔法？ ハジメテ見ルヨ！

つて、片言になつてゐる場合とかじやないし！

「ナニがドウなつてんだよ！」

片言抜けてねえし！

「……姉上？ あれえ？ おかしいなあ。姉上の魂を呼び起したはずなのに……」

陛下が首を傾げる。

また貴様のしわざか！

「は～や～く～も～と～に～も～ど～せ～」

地獄の亡者もビックリな低音でうなりながら、陛下の肩を揺ゆふる。外見ちびっこだからって容赦はしねえぞ！ 一のタガが！

「や、だ」

ガクガク頭を揺らしながら、強情にも陛下はそんなことを言つ。

「ぬあんだとおー！」

「落ち着いて姉上！ 深呼吸だよ！ ひつひつふー」

「それはラマーズ法だ！」

陛下が口を開く度に怒りのボルテージが上がってく気がするな、うん。

それにつられて、あたしの髪も更にうねうねする。

ジユトーの兄さんが少し考える人になつて、ぱつりと呟いたのが聞こえた。

「やむをえんな」

ぐはつ！

いきなりボディーブローをくらつたあたしは、再び夢の世界へサヨウナラ、元の世界でレポートの成績が最低のFをもうつとこつ、悪夢を見たのでした。

慣れつてホントに怖いモンだよなあ。

まず朝、鏡を見ても驚かなくなつた。

鏡に映るのは王姉キュレオリア。でも中身は尾上千歳のままなんだよね。

あれから一月が経つて、状況は依然進展なし。毎日元の姿に戻せ、元の世界に帰せつて魔王陛下に言つけど、あの自己中は聞きやあしない。

そんで、まあ、事情はアレだけど、タダ飯食うわけにもいかんでしょうてことで、地方の陳情を聞いたりなんだりつていう王姉殿下としての仕事を、引き受けちゃつてるワケですよ。

「王姉殿下におかれましては」機嫌麗しゅうつ、いつして謁見願えまして恐悦至極にござりますれば、我が国の益々の繁栄は大変喜ばしく、また魔王陛下におかれましても……」

でもさあ、何でこいつ、おつさんて話長いんかな。

まだ挨拶だけで本題入つてないし。

背筋は伸ばしてなきやなんないし、笑顔は崩せないし、ヘタなこと言えないし、ストレスたまるわ……。早く終わつてくれ、頼むから。これがナイスミドルだつたら耐えられるかもだけど、現実には丸々と太つたおつさんだ。しかもハゲ。

救いといえば、あたしのすぐ斜め後ろに爽やか将軍、もといミハイル＝ピロツツ将軍がいることかな。

いくら外見がキュレオリアだとしても、中身は現代日本の大学二年生尾上千歳だから、小難しい政治の話をされたつて、全部分かるわけがない。

そんなワケで将軍があたしの後見人になつてくれたんだよね、これが。

うんうん、怪我の功名つて、いつこいつとを言つてよしおね。

こんなカツコイイ男の人（カツコイイ男の子）が補佐（ヒツゾウ）してくれるんだから、頑張らないワケにはいかないでしょ。

でもさあ、ちよつと危機感を感じてたりもするわけで……。

だつてこのままなし崩しのうちに正式に王姉殿下とかなつちやつた
りしたら、ホントどうしようだよ。

あたしは手元の資料をパラパラめくつて、遠回しかつ大げさに話す
おっさんの話を整理する。

ジユトーの兄さんの話によれば、また大雨が降る可能性があるらしいから、早めに対応すべきだな。

ちなみにあたしかこうして字を読めたり、話が出来るのは、じいちゃんに呼ばれた時に使われた魔方陣に、あらかじめそういう式を書き込んだからなんだそうな。

けつ、用意周到過ぎて、涙が出らあ。

「…………以上で」やります、**王姫殿下**「やあつと終わつたんかい。マジで長かつたな。もつと簡潔かつ的確に話せつての。

三八〇

「あなたの話はよく分かりました。このじとせ陛下にも申しあげ、迅速に対処することを約束しますわ」

この一月で身についたもの、それはきっと厚い面の皮と演技力だ。

二二二 一九四〇年九月一日

あー、疲れた。

ぐねぐねと肩を回して、後ろに立つてゐる將軍を見上げる。

「あんな感じでどうですか?」

「上出来だよ、チトセ。お疲れさま」

あー、將軍の爽やかな笑顔と温かい労いの言葉に癒されるわあ。

将軍はあたしを千歳として扱ってくれる、唯一の人物だからね。他の人はあたしのことを完璧にキュレオリアとして扱ってくれる。身の回りの世話をしてくれる侍女のお姉さんたちも、恐れ多いとか何とか言つて、軽い話とか出来ないから、将軍と話してる時が一番気が楽なんだよなあ。

将軍は心のオアシスだよ、ホント。

「でも、ホントにいいんですか？あたしの補佐とかしてて。他にもお仕事があるんじゃないですか？」

だって将軍は仮にも“表の十将軍”的一人でして、ここで、ここでちよつと、この国の政治体制について簡単におしゃべりしてみよう。

「う、いきなりとか、何だとか言わない、そこ。」

まずはこの国が専制君主制をしいてるのは、陛下が政治を行つてることからも明らかだ。

それをサポートするのが、内政・外交を司る裏の十賢者と軍事・警察を司る表の十将軍。

ちなみにジユトーの兄さんは、裏の十賢者の一人なんだそうなあ、裏つていつても、怪しいとかそういう意味じゃないよ？

外に出て華々しく活躍する表の将軍たちに対して、裏から国を支える人たちって意味なんだつてさ。

まあ、あと部署やらなんやらが沢山あるらしいけど、あたし自身把握しきれてないんで、割愛させていただきますが、あしからず。

「領地は兄が治めているし、治安警備の方もちゃんと部下に命じてあるから。俺の部下は優秀だからね。最近は平和で戦も起こらないし、余裕があるから大丈夫だよ。それともチトセは俺が忙しくて側にいない方がいい？」

「そ、そんなんでもない！ 将軍にはお世話をなつてますし、これ以上負担をかけたくないなつて」

「チトセはそんなこと気にしなくつていいんだよ。大変なのはチトセの方なんだから」

ああ、ホントにいい人だ、将軍。
カツ「よくて爽やかなだけじゃなく、優しいだなんて、もつこの国
の宝だね、うん。

「姉上！」

「来たな！ 諸悪の根源！」

とつと走つてきた陛下が、あたしの足にまとわりつぐ。

「陛下、どうしてここにこいるんですか？ つていうか、仕事はどうしたんですか？」

また敬語に戻つてるのは、別に尊敬の念が湧いたとかそういう意味じゃない。

最近分かってきたことなんだけど、陛下はあたしに口汚くののしられるよりも、敬語を使われた方が嫌がるんだよね。つまりは嫌がらせの為です、はい。

「それとも、やつと帰らせてくれるつもりになつたんですか？」

「ううん。違うよ」

即行で否定してくれるよな、ふふ。これはもつ、挨拶代わりだ。

「今日の分はもう終わらせてきたの。急な案件が出なければ、大丈

夫だよ。だから、姉上をお茶に誘いに来たの」

こんなナリをしてらつしやいますが、この外見五歳児中身百六十歳の魔王陛下は、統治面では結構優秀な君主なんだそうザマス。

この可愛らしいお口から、経済だの軍事だの話題が飛び出すると、何だか変な気分になるよ。

陛下の頬をつまんで横に伸ばす。

うにょーんとよく伸びるな。餅みたいだ。

つていうか、百六十歳でこの肌のピチピチが、世の奥様方に恨まれ

そうだな。

「おひやひまへんか

「しません」

何が悲しゅうて諸悪の根源と仲良く茶あ飲まなきやなんないのさ。

絶対お断りだ。

「ダメなの？」

潤んだ瞳で上目遣いとかすんなよ。

絶対自分の利点知つててやつてるよ、コイツ。つて、コラ、スカートの裾を掴むな！

シワになんだろ！

ハイ、そこ。『陛下、お可哀想…………』とか言つて、目元をハンカチで押さえない！

ホントに可哀想なのは、あたしの方だから！あたしの心の叫びも虚しく、周りは完全に陛下の味方だ。く、ここはヤツのホーム。アウエーのあたしには分が悪い。ちらりと後ろを振り返れば、將軍が苦笑いを浮かべていた。目で『助けて！』と訴えたのに、『頑張つて』と返される。ちえつ。

それにしても、こつも陛下にびつたりくつこつしてゐる宰相閣下はびつしたのぞ。

ジユトーの兄さんがこのお子様の保護者じゃないの？
しつかり躊けてもらいたいもんだわ。

まあ、最近はあたしの魔力コントロール修行も見てくれてるから、忙しいのは分かるけどね。

陛下は泣き落としが無理だと悟つたのか、作戦を変更してきた。

「姉上、美味しいお茶菓子もあるよ。この間姉上が美味しげって言つたナニヨン、また作つてもらつたから。一緒に食べよう？」

う、あのガレットに似た焼き菓子……。

あれは確かに美味しかつた。

バターの風味が利いてて、甘過ぎない上品な味。

うん、流石宫廷料理人つて思つたしね。

ヤバいな、ツボをついてくるよ。

うー、プライドを取るか、実を取るか。悩みどころだなあ。

更に追い討ちをかけるように、陛下は言つ。

「あとね、他にも美味しいお茶菓子があるよ。焼きたてが一番なん

だから、早く行こう? 「

あたしはもう一度、将軍を振り返った。

「……あと、どのくらいお仕事ありましたっけ?」

「お茶する時間くらい、大丈夫だよ」

はは、将軍は『お見通しだよ』とこうふうて、的確な答えを返してくれました。

仕方ないじゃん。甘いもの、大好きなんだよ。

「やつた。ね、姉上。早く行こう

「分かった。分かりましたから、袖を引っ張らないでください! 伸びる!」

ちゅうと、あたしが惹かれたのは、美味しいお菓子たちなんだからな!

そんな嬉しそうな顔すんなつーの!

あたしは彼の姿をじっくり数十秒見つめて、見なかつた振りをするべきかどうか悩んだ。

「どうしたの、姉上? お茶が冷めちゃうよ?」

「そーですねー」

陛下の言葉に、やる気がないアルタの観客のような返事しちゃうくらいに衝撃だった。

うつわー、あのジユトーの兄さんがエプロンつけて、セッティングしてるよー。

まだフリル付じゃないのが救いだけど。

陛下に引っ張られつつ連れてこられた英國式庭園のような中庭。衝撃はかなり大きかった。

エスコートされるままに席について、意を決して尋ねてみた。

「あの、どうして宰相閣下がセットされてるんですか?」

「えー、だってお菓子作ったの、ジユトーだもの」

「ええっ!」

うわっ、マジっすか!

あのジユトーの兄さんが？

常に眉間に深いしわを刻んで、不機嫌オーラを撒き散らしてゐる宰相閣下が？

うわあ……。

「つていうことは、もしかしてこの間のえ～と、な、ナンニヤ？」

「ナニヨンです」

「そうそう、そのナニヨンも閣下が作ったんですか？」

「そうですが、それがどうか致しましたか？」

「……いえ、ちょっと意外だつただけです」

う、『何か文句あつつか？』って目で睨まれたよ。

陛下がいない時はあたしに敬語なんて使わないくせに、陛下がいると言葉遣いは丁寧になるんだよね、ジユトーの兄さん。まあ、あくまでも言葉遣いは、だけど。

「ジユトーはね、甘いものを作るのが得意なんだよ。とつても美味しいから僕も大好きなんだ」

につっこり笑う陛下に、兄さんが『恐れ入ります』と頭を下げた。はは、人間つて、意外な特技を持つてるもんだよね。

「あ、そうだ。姉上にお渡しするものがあつたんだ。ちょっと待つててね」

美味しいお茶とお菓子を頂いた後に、いきなり陛下がそんなことを言った。

こつち返事も聞かないで、とたたたたと走つてく陛下の背中を見送つて、あたしはジュートーの兄さんの方を向いた。

今なら、他の耳はない。聞きたいことを聞くチャンスだ。

「何で、陛下は……めげないんですか？」

あたしは何度も陛下を粗雑に扱つてきた。

今だつて、まつたくもつて可愛がつてなんてない。

それでも陛下が、まだあたしを姉として慕つてくるのは何故？
あたしの前世がキュレオリアだつたとしても、別人だつてあたしの態度を見りや、明らかでしょ？

もしかして、陛下つて……マゾ？

兄さんはあたしの問いに、少し考えるような間を置いてから、口を開いた。

「陛下は……お寂しいのだ」

「あなた達がいるのに、ですか？」

たくさんの人がいるでしょ？

陛下のことを可愛がつて、心配してくれて、サポートしてくれる人
がさ。

兄さんは、はあ、と息をついて言つ。

「だが家族は特別だらう。陛下に臣下はいても、友や家族はいない。
陛下にとつて、姉君は唯一の肉親だつた。……魔王となる者の運命
を知つてゐるか？」

「いいえ」

「魔王となる者は、その身に膨大な魔力を宿して生まれてくる。そ

して母体がそれに耐えられることは、非常に稀だ

「それは……つまり……」

母親の命と引き換えに生まれてくるつてこと？

あたしの表情で悟ったのか、兄さんは小さく頷いた。

「陛下もその例に漏れなかつた。父君もすでに病没しておられた。陛下をお育てしたのは、キュレオリア様だ。陛下にとつて、キュレ

オリア様は姉であり、母だつた」

「キュレオリアは、陛下を、母親を死なせた弟を恨まなかつたんでしょうか？」

「さあな。本心がどうだつたかは、本人にしか分からぬだろう。だが、キュレオリア様は陛下を育て、選王までもちこんだ。それだけは、確かなことだ」

「そうですか……」

大体の事情は分かつた。

陛下が何故、キュレオリアにそこまで執着するのか。

でもさ、不幸な生い立ちが全ての免罪符になるとは思わないよ。あたしの何倍も生きてて、そんなことも分からぬのかね。

あたしは皮肉な笑みを浮かべた。

「じゃあ、あたしはどうなんでしょうね。あたしは自分の家族と離れ離れになつても、構わないつてコトですか？」

ギリギリ十代とはいえ、あたしはもう親がいなけりや何も出来ない子どもじやない。

けど、だからといって、家族とこのまま永遠に会えなかつたら？ そんなの、冗談じやない。

ジユトーの兄さんは、それに答えることが出来なかつた。

だけど代わりにポツリと呟いた言葉に、今度はあたしが答えられな

い番だつた。

「今の陛下にとつて、姉上はすでにあなたのことだ。それだけは、どうか覚えておいて欲しい」

その重たい沈黙を吹き飛ばしたのは、またもやあたしにタックルをかますようにして抱きついてきた陸下だった。

「ぐえつ！」

「姉上、お待たせ！……ぐえつしたの？ 何かあつたの？」

「陛下はあたしたちの間に漂う微妙な空気を敏感に察知したらしく。『いえ、別に何も』

「本当に？ もしかしてジユトーにいじめられた？」

あー、まあ、それに近いもんはあつたかな。

厳密に言えば、まったく違うもんだけぞ。

兄さんは陸下の保護者だから、心配でしようがないんだろうな。ちらりとジユトーの兄さんの方を見ると、相変わらず不機嫌な表情かおしてゐる。

多分、わざわざと否定して思つてんだろう。

さあて、どう答えようかね。

「ね、姉上、ぐえつしたの？ 本当にジユトーにいじめられたの？」
陸下は心配気にあたしを揺さぶりながら、ジユトーの兄さんを睨んだ。

ジユトーの兄さんが心外そうに否定する。

「そのようなことは致しません」

「僕は姉上に聞いてるのー、ねえ、ぐえつしちゃつたの、姉上ー！」

陸下が慌てふためく様を見るのは楽しげで、あんまりやるジユトーの兄さんが可哀想だし、まあ、この辺でハツカたりは勘弁してやりますか。

「ホントに何にもないですよ。つていうか、姉上って呼ばないでください。あと、早く元の姿に戻して、元の世界に帰してくれるかなあ？」

「えー！」

いいともつて、言つてよ。つまんないな、もつー！

まあ、異世界人に通じるとは思わないけどさ。通じた方が驚きだけださ。

「はい」

と陛下から手渡されたのは、小さな包みだった。
どうやら陛下はこれを取りに行つてたらしい。

温かいくつことは、中身は焼きたてのお菓子だつたりするんかな。
陛下を見れば、キラキラした顔で見上げてくる。

「これね、僕が頑張つて作ったの。姉上に食べてもらいたくて。い
つぱいジューに手伝つてもらつたけど……」

包みを開くと、少し焦げた不恰好なクッキーのようなお菓子が入つ
てた。

その一つをかじつてみる。

「おいしい？」

期待顔の陛下。

「不味い……」

「え」

陛下の顔が曇る。

「……ことはないですよ」

そう言って、二つ手に手を伸ばした。

うん、ジューの兄さんのみたいに、ものすこいく美味しうといつこ
とはないけど、結構美味しいかな。

まあ、そんなこと、言つてやるつもつはないけどね。

三つ目、四つ目と全部食べ終えて、一言。

「じゅうそう様でした」

あー、そんな嬉しそうな顔しても無駄だからー。

ほだされたりなんか、絶対しないからな！

あたしはさつさと現代日本に帰つて、お昼休みにウキウキウォッチ
ングするんだから、そこんトコ、忘れんなよー。

あたしはふいつとそつぽを向いて、お茶を一気に飲み干したのでし
た。

想つことわざ罪ならば、どうかこの身に罰を。
そうすれば、私が貴方を本気で想つていて、証明できるでしょう。
貴方の節くれだつた長い指に私の指を絡めて、その温かい胸に顔を
寄せる時、私はこの身に流れた血を呪つのです。貴方と私の間には、
大きく深い溝があると。

でも、どうしてでしょう。

それでも良いと思つてしまつのは。

このひと時を過ごし、語り合つことができないなら、いくつもの罪を
負い、罰を受けることも厭わない。

私はただ、貴方の側にいたいだけなのですから。

「チトセ、チトセ」

え、あ。ヤベ、寝てた。

将軍の声にはつと顔を起こすと、サインしていた書類に点々と水が
落ちた跡があつた。

よ、よだれ！

うわあ、仕事中に居眠りしてた所か、書類によだれまで落としちゃ
つたよ！

ど、どうじょ！

「じじじ」と口元を拭うあたしに、将軍は違う違うと言つて自分の目
元を指した。

「眠りながら泣いていたよ。悪い夢でも見た？」

「は、いえ、覚えてないですけど

むー？ 夢なんて見たんかなあ？

全然覚えてないんだけど。

将軍が差し出してくれたハンカチで、目元を拭つ。

あ～、確かに泣いてたみたいだ。

なんだか、将軍には恥ずかしいトコばかり見られてるな。

「疲れているのかな？」

将軍が心配そうな顔をして、あたしの顔をのぞき込む。

「おお！ 美形のどアップ……じゃなくて！」

「いえ、心配かけてすいません。ホントに大丈夫ですから」

お茶の時間まで空けてもらったのに、これ以上迷惑かけらんないしね。

将軍がちょっとため息をついて言う。

「でも、もつと俺を頼ってくれていいんだよ？」

「ありがとうございます。でもあたしが引き受けたって言つた」と
ですし、それにそんなに頼つたら、将軍が大変じゃないですか。今
だつてこんなに頼りっぱなしなんですから……」

口ではたいしたことないよって言つても、やつぱり大変だと思つ
んだよね。

ただの補佐役ならまだしも、あたしはズブの素人。

政治どころか、この世界についても口クに知らないんだし。

そう言つと、将軍は柔らかい笑みを浮かべた。

「そんなことないよ。チトセの方が頑張つているじゃないか。それ
に俺はこんな時でなくては、国政に参加できないからね。むしろ感
謝したいくらいだ」

「いや、そんなに褒められると恥ずかしいです。あたしが出来るこ
となんて、ホント少ないですもん。でも、なんかもう、これつて意
地みたいなもんですから」

「意地？」

「ええ、そうです」

だつて何の権力もない小娘が何言つたつて、発言力は無きに等しい
でしょ？

だつたら、まあシャクだけど、王姉つて立場をフル活用して、役に
立つトコ見せて、影響力をつければいいんじゃないかと考えたワケ
ですよ。

あの天使の皮を被つたワガママ自己中で人の話を聞きやしねえ魔王陛下を黙らせるのには、それくらいしなくちゃでしょ。

まあ、ちょっと時間がかかりそつだけど、絶対還るつて決めたし。だつてあたしには、日本の文学をもつとグローバルにするつて野望があるんだからね！

ビバッ古典！ ビバッ文学！ ああ！ 文字つて偉大な発明だね！ つて、げふげふ。ちょっと興奮し過ぎました……すいません。「え、まあ、そういうワケなんぞ、どうぞお気になさらず」につこうどじまかすように笑いマース。

どうかわっさの痴態は忘れてぐだサーイ。

あつ、怪しい外国人風の発音になつちやつたのは、「愛嬌つて」とにしといで！

「……じゃ、仕事しようか？」

「そうですね」

將軍が置いたビリヤーな間を、あたしは怖くてシッコめませんでした。

しゃつと、最後の一枚にサインをし終わる。

羽根ペンなんて代物、現代日本ではまず使わないから、これで書けるようになるまで、ちょっと苦労したんだよなあ。

そう思いながら、ペンをペン立てに戻して、書き終えた書類を將軍に手渡す。

「はい、お疲れ様。今日の仕事はこれで終わりだから

將軍が書類の最後の一枚をチェックし終えて、そう言つた。

「ふあい」

あ〜、疲れたあ。

手首痛いし。書類の書き過ぎで腱鞘炎とかなつたらイヤだな。

IT革命つて、ホントに偉大だったんだね。

まあ、ノートをとるのは手書きだけど、レポートなんかはもうパソコンだもんな。

「大丈夫？ チトセ」

「大丈夫ですよ。座りっぱなしで、ちょっと体が固まっちゃいましてけど」

「ああ、美形のお兄さんに心配されるのって、ホントに嬉しいことだなあ。」

思わず疲れもふっとんじゃうよ。

将軍は書類を片付けながら、窓の外を見て言った。

「もう夕暮れだね。どう、チトセ。喉渴いただらう？ お茶でも頼もうつか」

将軍とお茶！ とっても魅力的な提案だねえ！

うー、でもなあ。

「すいません、将軍。ちょっと先約が……」

「また陛下の所かな？」

「いえ、宰相閣下の所です」

意外な人名だつたんだろう、将軍が軽く驚いた表情をする。

まあ、あたしとジューの兄さんは、仲良し^{かお}によしな間柄じゃないからね。

意外な組み合わせに思えんのかな？

「フェイ卿の所に？ 何でまた」

「ほら、あたしつて体はキュレオリアですけど、魔力のコントロールが出来ないじゃないですか。それで宰相閣下にコントロールの方とか、教わってるんですよ」

「ああ、そういうこと」

将軍は納得したようだ。

「でも全然上手くいかなくつて」

「フェイ卿の教え方は厳しい？」

「まあ、あの宰相閣下ですからね」

万年不機嫌男ですよ、相手は。

もう一ヶ月が経つけどさ、まだ一回も笑ったトコなんて見たことないよ。

あたしがそう言つと、ピロッソ将軍も見たことがないらしい。
とんでもないことを言つ。

「彼とはもう、五十年くらいになるけど、見たことないなあ」

「五十年でつて、スゴイですねえ」

色んな意味でな。

つと、こんな長話して遅れたら、また兄さんこ小言をへらつよ。一

急がないと！

「す、すいません。あの、そろそろ行かなきゃなんないんで

「うん、頑張つてね」

「はい」

ああ、励ましてくれる人がいると、やる気も違つよ。

しかもそれがカッコイイお兄さんだつたりしたら、もう最高だね！
もう、槍でもビームサーベルでも、どんと来いって感じだからね。

「まずは精神を鍛えるべきだ」

と、万年不機嫌男こと、ジユトール＝フェイ宰相閣下は仰いました。「魔力というものは、暴れ馬だと思え。それを御する手綱が精神力だ。いかなる時も冷静でなくては手綱は緩み、力が暴走してしまつ。いいか、一番大事なのは平常心だ。平常心を養え」

「はい、それは分かりますよ？ 理屈はね」

でもさ！ その修行で頭の上に腐つた卵を置くつてどうよ！ あり得ないでしょ！

だつて腐つた卵だよ！？ いくら小さなクッショニを置いたつて、卵なんだよ！

しかも腐つた！

「あのつ！ 宰相閣下！」

「何だ？」

ジユトーの兄さんが『無駄口叩いてる余裕があんのかよ、アーン？』って声で聞き返してきた。

もつと愛想よくすればいいのにねえ。折角、顔と声はいいんだからさ。

まあ、兄さんにしたら余計なお世話だらうナゾ。

あたしは正面を向いたまま、背筋をピンッと伸ばして、頭上の卵を落とさないように気をつけながら尋ねた。

「何で腐つた卵なんですか！ この間まで普通のボールでしたよね！」

あのつ、ホントに恐ろしいんですけど！

ただの卵だつて十分怖いのに、その頭に「腐つた」つてついたらやうんだよ！？

まだ外側は平氣だけどさ、割つたら確實に腐臭が広がるつて！ 槍でもビームサーベルでもどんと来いつて言いましたけど、腐つた

卵はマジで勘弁してください！

あたしは必死でそんなことを訴えたのに、兄さんは「ザビューム」
はあ」とため息をついた。

「あなたは一月も同じ修行をしていて、何故進歩がないのかを考え
ないのか。それはあなたに緊張感が欠落しているからだ。適度な緊
張感は神経を敏感にする。よつて割れやすいものを選んだ」

「でも腐つてる必要つてないですよね……」

「それは要らぬものを有効活用しているからだ。この間グレンフィ
ビスが大量に卵を生んだといって、城に献上されたは良いが、陛下
から一兵卒に至るまで、三食卵料理を四日続けたが、結局余つてし
まつた。ただ捨てるだけではもつたいたいからな」

そんなことまで気にするんですか、宰相つて……。

意外とみみつちい？

「グラルフ……何とかつて何ですか？」

「グレンフィビスだ。まったく“グ”と“フ”しか合つていないと
ころうが」

ジユトーの兄さんが大げさにため息をつく。

「どうもすみませんね！ あたし、カタカナは苦手なんですよ！
でも兄さんのいいトコは、呆れながらもちゃんと説明してくれるト
コだ。

こういう基礎知識的なことや、魔力関連のことはきちんと教えてく
れるんだよね。

「グレンフィビスというのは、鳥の一種だ。飛べないが好戦的で、
極彩色の羽を持つ。主に卵と肉を食用にするな。羽も飾りなどに使
わることもある」

「鳴き声はコケコッコーとか、クックドウドウルドゥーとかだった
りします？」

あたしは極彩色の鶏を想像した。
美味いのかなあ。

あ～、焼き鳥食いてえ。ねぎま～、つくね～、皮～、手羽先～、ね

ぎま～。

あたしは塩よりタレ派です。炭火焼きなら、なお良し。
「コケ？ グレンフィビスの鳴き声は『そそんそおざやお～す！』
だ」

「……ふつ」

うわあ、何か微妙な泣き声だな、オイ。むしろ吠え声？
怪獣じやあるまいし。

しかも宰相閣下のモノマネ付きだしさ。

多分、本物のグラ……何とかの鳴き声を再現してくれたんだがつけ
ど、はつきり言つて笑える。

だつてあのジユトーの兄さんが、『そそんそおざやお～す！』つて
吠えるんだよ？

一瞬、頭の上の腐つた卵が傾いだ。

ヤバッ、動いちゃダメだ！

笑うな、あたし！ 笑つたら異臭騒ぎだ！

ピクピク動く腹筋と頬に力を入れて、必死に堪える。

心頭滅却すれば火もまた涼し！

心を穏やかにすれば、どんなに面白い笑えることだつて耐えられる
はずだ！

吸つて、吐いて、吸つて、吐いて、吐いて、吐いて、
吸つて。

「ふう」

何とか堪えられた。

何だ、あたしだつてやれば出来るじゃ～ん。うんうん。

あ～、良かつたあ。臭いのはヤダもんね。

そう、その油断が命取りだつた。

あたしはその瞬間、ヤツのことを失念してたんだ。いつも唐突にや
つてくるヤツの存在を。

「姉上～！」

ぐはっ！

いつもの「じ」とく気配を感じさせず、すっかり油断していたあたしの腰に、タックルかましやがつた魔王陛下。

バランスを崩すあたし。

あたしの頭から滑り落ちる腐った卵。

ちゃつかり自分の周りだけ結界を張る宰相閣下。

あたしの頭から滑り落ちた腐った卵は、万有引力により、床へ向かって落ちていく。

そして次の瞬間。

「うわっ！ マジでくっせえ！」

「マジでヤバイよ！ 皿にしみる！ 息できないし！ つていうが、したくない！」

恐るべし、グッピ……なんとか！ たった一つで生物兵器並みの破壊力だ！

鼻がひん曲がるような臭さと、まさにこのことだつて！

「臭いよう、姉上」

「テメエの所為だらうが！ ボケ！」

どさくさに紛れてしがみついてくる陛下をはつたおしながら、罵倒する。

敬語とか嫌味とか嫌がらせとかも全部吹っ飛んだよ！ もう嫌だ！

こんな生活！

絶対帰つてやる！

グ……何とかの腐臭が蔓延する室内で、あたしは決意を新たにしたのでした。

はあはあはあ。

あまりの臭さに耐え切れず、あたしは部屋の外に逃げ出した。腰のあたりに、まだお荷物がへばりついてたけど、そんなのにかまつての余裕はハツキリ言つてない。

いや、ホントに。

あれだよ。何をおおげさなどか、思つてらつしやるであらう、そこがあなた！ 甘い、実に甘い！ チョコレートケーキの上に生クリームをのせて、粉砂糖をかけちゃうほど甘い考えだよ！ あの臭さは体験した者じやなきや、絶対解かんないつて。

まあ、強いて例えるなら、一年風呂に入つてないオッサンが、ヘドロが溜まってそうなドブ川で水浴びをした後、くさやと納豆と二ん二クを食べて吐いた息に、なおかつ生ゴミの腐臭をブレンジしたような、感じ？

もちろん、そんな臭いを今まで嗅いだことなんてないけどさ。イメージだよ、イメージ。それくらい臭かつたつてコト。あんな体験は一度とゴメンだ。

「姉上、大丈夫？」

「大丈夫なワケあるはずないじょう。何でいきなりタックルかましつくるんですか？ ワザとですか？ ワザとですね？ いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも！ 腰痛めたらどうしてくれるんですか？ 若い身空でギックリ腰とかシャレにならないんですけど。大体、陛下はあれですね、人の話を聞かなさ過ぎですよね。世界の全てが自分中心に動いているという天動説でも信奉してらっしゃるんですか？ 世界は私の為にあるとでも思つてらっしゃるんですか？ 自分にそつなる値打ちがあると思つてるから、そんなことが出来るんですよね？ でもそれって自己中にもほどがあると思いません？ ああ、思つてたらそつはなりませんよね。すみま

せんでした。じゃあ言い方を変えます。今すぐそのことを自覚してください。そしてあたしを元の姿に戻して、元の世界に帰らしてください、つーか、むしろ帰せ、ボケナス」
はあ、はあ。

ここまで一気にまくしました。

うーん、ストレスって溜め込むと体に悪いからなあ。
ただでさえこの一月、ストレスたまる生活してるってのこり、やうに追い討ちをかけるようなことを、なんでまたしどかしてぐだぐだなんですかね、陛下は。

何だから言つにくやうに下向いてるけど、同情なんてカケラもしませんよ？

「あのね、姉上。お話があるの」
おーい？

ホント、人の話は聞きましょうや。何で、そこで自分の話になるかな、オイ。

「……あたしの言つてる」ことが分からなかつたなら、もう一度言つて差し上げましょうか？
ノンプレスでな。

「ううん、姉上のお話は分かつたよ。つまり元の姿に戻して、元の世界に帰せつてことじょう？」

「そうです。今すぐ帰してください」

「でも、僕は嫌だし」

オイ、コラ。

「それにね、僕のお話の方が大事だから」

「……あたしの話は大事じゃないって言つんですか……」

「えへ」

えへじやねえぞ！ えへじや！

頬を染めてもじもじすんな！ それでも百六十歳か、ワレー！

「それで？ 陛下のあたしの話より大事な話つて何ですか？」

腹の底からひづくうーい声を出してやる。

しかもいつもは浮かべないような極上の笑顔付きだ。

「うん、あのね……」

普通にスルーしてくださる陛下が、あたしは大っ嫌いです。

「姉上？ 聞いてる？」

「力ケラも聞いてません」

けつ、聞けるかつつーの。

あー、あなたがそんな怒った顔したって、まったく怖かないですよ。すねたように睨んでも無駄だつて。

美人さんが怒ると怖い法則は、もっと大きくなつてから適用されるもんですよ。

今は可愛い子はいくら怒つても、全然怖くない法則が適用中だよ、アンタは。

「もう、姉上！ とつても大事なお話だつて言つたよね？ ちゃんと聞いてよ」

「ハイハイ」

まあ、一応聞いて差し上げますわ。あたしにとつて有益な情報かも知らないしね。

「本当にちゃんと聞いてね。とつても大事なお話だからね」「分かつてますって」

しつこいなあ。

「あのね、今ね、ちょっとお城の中がゴタゴタしちゃつているの。派閥争いみたいのが出来ちゃつてね。僕も治めようとしているのだけど、水面下で動かれると中々難しくて。でね、その中で姉上を利用しようとしている輩がいるつて情報が入つたの。まだ詳しい出所が分からぬから、特定を急いでいるのだけど……。姉上、絶対一人にならないでね。あと、あまり親しくない人と一人つきりとか、大勢対一人とかにならないように気をつけて。大丈夫？」

「分かりました。気をつけますよ」

あー、あたし最近張り切つちゃつてるからなあ。ちと裏目に出来ちゃつたカンジ？

陛下が“姉上”に執着してるのは、皆知ってるもんね。

そういう輩が出るのは、むしろ自然な流れかもな。

うんうん、どの世界のどの時代でも、権力って魅力的なのね。

まあ、あたしは権力とか、どうでもいいけど。

「本当に大丈夫？」

あ、何さ、その疑わしいものを見るような目は。

あたしにだつて、それくらいの知識はあるんですからね。

権力争いの醜さは、古典の世界にだつてあるんだからな。

「大丈夫ですつてば、陛下。キチンと気をつけますよ。あたしだつて利用されてポイッとか、絶対にイヤですもん」

どうせなら、あたしが利用する立場に立ちたいよ。面倒なことは嫌いだけどな。

「本当に本当に？」

「本当にですつてば。あんまりしつこいこと、あのベレッタヒッピーの

腐つた卵を食わせますよ？」

「姉上、あれ、グレンフィビスの卵だよ」

「……そうとも言いますね」

すいません。ひとつづ一文字も合わなくなりました。

あ、何か、ホントにスンマセン。
ちょっとアレですよ。

しぐじつた？

あはは、まあ、そういうこともあるわ、うん。
小難しいマナーに毎回こりする豪華な晩餐の後、見事に捉まりました。

脂ぎったオッサンたちに。

「よい夜でござりますな。王姉殿下」

「そうですね、キツトカツト大臣」

「私の名前はキツチエカツツです、王姉殿下」

「あら、『めんなさい』。懐かしい何かと混同していたようです」

うん、あのサクサク感がたまらないヤツ。

「このような所で、いかが致しましたか」

「少し夜風に当たるうと思いましてやつて來たんですよ……ヌーボー

ー大臣」

「ヌーボーです、王姉殿下」

「ええ、そう……ヌーボー大臣」

「しかし奇遇ですね、麗しの王姉殿下と直にお話ができる、大変嬉しううござりますよ」

「そうですね、サツポロボテト大臣」

「サツテポロンです」

「ごめんなさいね、サツテポロン大臣」

うん、ちょっとヤバイよね。

「ヨイツら、あまり評判が宜しくないらしい、大臣たちらしーし。

部屋に戻つて、本読んでたら、小腹が空いちゃつて、何か頬もうと思つて呼び鈴鳴らしても誰も来やしねえから、ちょっとそこまで出てきたら、ね、じつなちやつたワケで……。

ぶつちやけ、ピンチ？

しかし「オイシら、あたしのこと馬鹿だと思つたるつな。
全員見事に名前間違えたからね。

これがナイスマイルのオジサマだつたら、絶対一発で名前覚えるのに……。

カツコイイ人や美人なお姉さんの名前は、すぐ覚えられて忘れない。
我ながら都合のいい記憶力ですこと。

「所で、ここで会つたのも何かの縁でしょう。少しお話致しません
か？」

脂ぎつたオッサンのーがせつと、庭園の方を示した。

何？ あつちでゆつくり座つてお話しまじょつて口ト？

絶対嫌です。お断り。

でもねえ、そう簡単に言えれば、楽だけじね。
まあ、仮にも王姉殿下とか呼ばれちやつたら、下手なこと言えない
んだよね。

好きでやつてるワケじゃないけどや、一応それで衣食住を保障して
もらつてるワケだし。どうしたもんかなあ。

つーか、こんなことになつたと知れたら、またジユトーの兄さんの
大目玉を食らいそうだ。

うわあ、マジ勘弁して欲しいわ、ホント。

さつさつだつて、勝手に部屋から逃げた口ト、じつひどく絞られたん
だからね。

兄さんタッパあるし、声だつて低いから迫力満点なんだよ。
マジ怖いって。陛下の百倍怖いね。

ホントに最近運ねえなあ、あたし。

どうせ囮まれるんなら、美形の兄ちゃんか美人の姉さんの方がいい。
脂ぎつたオッサン、しかもブサイク、しかも何か下品つぽいのなん
か、最悪でしょ。

「王姉殿下？ どうか致しましたか？」

「いえ。どうも致しませんが？」

「ではよろしいでしようか？」

「そうですね……」

あたしを暗殺したつて、陛下の怒りを煽るだけつていいことは、どんな馬鹿にも分かるハズ。

危害を加えようとはしないでしょ。

コイツらのねらいは、おそらくあたしを丸め込むこと。舌先三寸や貢物、それであたしを自分たちが有利なように操りつけて腹だね。つまりはおべつかと賄賂だ。

ここで強く拒否すれば、逃げることは出来ると思つ。なんてたつて、あたしの方がここじゃ身分が上だからね。無理矢理連れて行つたら、コイツらの方が不利だ。

ついでにあたしからついてつた場合、あたしの立場が悪くなる可能性があるんだよね。そこでどんな取引があつたかって、勘ぐられるのがオチでしょ。いくら王姉殿下とか言つても、逆賊と周りに思われちゃうかもだし。面倒なことは避けたいつてのが本音。

うん、ここは引き下がつた方が得だね。

それにこんなオッサンたちに囲まれて話なんかしたくないし。目がギラついて野心丸見え。

あとで陛下かジユトーの兄さんに名前言つとけば、すぐに田つけられるでしょ。

あたしはそういう考えて、王姉殿下スマイルを浮かべた。バリバリの一般ピープルのあたしが一月かけて浮かべられるようになつた、最終兵器（？）だ。

「申し訳」ございませんが、お断りをせて頂きます。このよつな夜更けに殿方とお話するのは、大変はしたないと聞いておりますので」

色んな小説なんかで読んだ、お上品な喋り方つていうのを実践中。

しかしこれつて、現代の大学生のセリフじゃねえよなあ。

あー、ムズかゆい！ あたしのキャラじゃないんだつて！

こんな姿、絶対友達には見せられないね！ お前誰だよ！ つてツ

「『ミ』に入るし、絶対。

まあ、そんな心情を表に出さないくらいに面の皮は厚くなつたけどな。

自分がこんなに演技派だとは、思つても見なかつたよ。オッサンたちはまさか断られるなんて思つても見なかつたのか、なんか慌てて相談してゐる。

なんであたしがそんな大人しくついてくと思つてたのかね。そんなホイホイ後ついてくような尻軽に見えたとしたら心外だね。まあ、美人さんだったら、ちょっと考えちゃうけど……多分。

「では、失礼しますね。お休みなさい」

いつまでも馬鹿なオッサンたちに付き合つてゐるほど、あたしはお人よしじやないんでね。

わざわざと部屋に戻ることにした。

無事に部屋にたどり着いて、あたしはもう一度呼び鈴を鳴らしてみた。

ちょっと待つても、やっぱり誰も来やしない。

なんかオカシイよな。

あたしはふかふかのベッドに腰を下ろして、さつきのことを考えてみた。

普段なら、ちょっとと呼び鈴鳴らしだけで、すぐに侍女のお姉さんがすっ飛んでくるのに、誰も来なかつたから、あたしは直接出ようと思ったワケだし。

それにはオッサンたちは、明らかにあたしを待ち伏せしてゐたみたいだつた。

偶然を裝つてたけど、それにしては態度が不自然だつたね、あれは。あと気になつたのは、オッサンたちが誰かの指示で動いてるみたいだつたコト。

相談してゐる声が少し聞こえたけど、『あの方』がどつのこつとつて言つてた。

なんか、ヤバイなあ。つていうか、きな臭い。

あんな小物じゃなくて、もっと大物が後ろにいそうだなあ。マジで気をつけた方がいいかも知んない。

まさか部屋まで押しかけるつてコトはないとは思つけど、念のため窓とドアの鍵とまじないを確認した。

ただ鍵をかけただけじゃ、あまり効果ないらしいからね、強い魔力を持つた人にとっては。

「シリアルスつて苦手なのになあ」

あたしつて、コメティ派なんだよね。

なんでこんなコトになつちやつてんだろ。権力争いとかお家騒動とか、無縁な世界に生きてたハズなのにさ。

「これもそれもあれもどれも、全部陛下の所為だ！ ちくしょう！ 何かあつたら呪つてやる！」

そんなことを叫んで、これまたふかふかの枕を「ペッちゃん」にするため、ボカス力殴り、とび蹴りをくらわし、ジャーマンスープレッキスホールドをキメたトコで、少しスッキリした。もちろん最後はちゃんとブリッジだ。

よし、枕もいい具合に「ペッちゃん」になつたことだし、これで安眠できるね。

この世界に電氣なんてモノはないらしいけど、ビックリ仕組みだか明かりはある。

ピロツツ将軍に聞いたら、これも魔力がエネルギーらしい。ホントに便利だね、魔力つて。しかもエコだ。あたしは明かりを消して、ベッドに入った。

某あやとりと射的が天才的な少年のようにはいかないんで、すぐには寝付けないけどね。

それでも大分うとうととしかけた時、微かな物音がした。

最初は風でしょって思った。

上空に浮かぶ城は、結界が張つてあるとかでそこまでの強風と寒さはないけど、地上に比べればそれなりに風は強い。

初めの頃は気になつて眠れなかつたけど、最近はもうぐつすりだ。だから今回も気にならないで寝返りを打つ。

その時、ベッドが不自然に揺れた。まるで誰かが乗つかつて来たみたいなカンジで。

あたしは飛び起きようとして、誰かの手で口を押さえられて後ろに倒れた。

ちょっとまつてよ！ まだ頭がスッキリしないんですけど！ え！

何！ どうしたの！

声を出さうにも押さえられちゃ無理だし！

「むがつ、もがつ」

暴れようとした手は、まとめて頭の上に押さえつけられた。

「大人しくしる」

え……？ この声は……もしかして……。

暗闇に慣れた目に、目の前の男の顔がぼんやりと見えた。

「こうこう」という風の音が、やけに大きく聞こえた。

頭の中がぐるぐるして、色んな考えが巡る。

マジかよー、こ、ウソでしょー、ヒ、エヒトトー、せ、エヌハルト

あたしは暴れるのを止めた。

この人相手に暴れても無駄じゃん？

口をふさがれてた手が外された。

「ふう、苦しかった。って、どうか、あなたたったんですね。……ヒロツツ将軍。でも少し軽率な行動だと思いますけど？ こんなことをしなければ、あなたに疑いの目は向けられなかつたハズじやないですか」

「チトセは、今の状況が分かっているのかな？」

將軍がいつもと同じ爽やかな笑みを浮かべた。

でもこんな時に見ると、その爽やかさが逆に嫌らしく見えるね。いい男が台無し。

「…もかん分かってある

「まさか、とても驚いてますよ」

いや、ホントにどうでも驚いてるから。驚きすぎて一回転しちゃう

だから表面的には落ち着いて見えるんだがハナビヤ、まだぐねぐねしてゐるもん、頭ん中。

「でもやつれのせ違つてだよな

「俺が疑われてないつていう所だよ」

将軍の笑みが自嘲的になつた。

こつちを向きながら、あたしじゃない遠くを睨みながら言つ。

「特に宰相閣下がね。普通将軍職は国政に関わらないから、目をつけられた。知つてるかな？　君の侍女の過半数は俺の推薦だつたんだよ」

「……人払いしたのは、将軍ですか？」

「そうだよ。でも意外だつたな。君なら彼らの誘いに乗つてくれそうだと思ってたのに」

「やっぱり、あのオッサンたちの裏で糸引いてたのは将軍だつたんですね。でも残念でしたね。あたしを引っかけたいなら、もつと顔のいい方を用意しとけば良かつたんですよ」

「本当にね。あれは迂闊だつたな。チトセが一月でここまでたくましくなるとは思つてもみなかつたよ」

そして将軍はあたしの、キュレオリアの髪を一房、あたしの両手を押さえていない右手ですくつ。

「なあ、手を組まないか？　君の王姉としての立場と俺の能力があれば、あの辛氣臭い宰相閣下も廢せるかもしね。どうかな？」

「それだつたら、最初つからそつしたら良かつたんじやないですか？　こんなコトする前に。それにちよつとお尋ねしたいんですけどね。戸締りはしつかり確認したハズなのに、どうやつて入つて來たんです？」

そりやもう、念入りにチェックしたハズなんですけどね。鍵もまじないも、寝る前はちゃんとなつてたんだけど

「まじない？　ああ、あれも侍女に頼んでちよつと細工をさせてもらつたよ。鍵なら簡単に開けられるしね。それと初めから君を誘わなかつた理由だつたかな？　それはチトセがあの馬鹿なキュレオリアの生まれ変わりだからだよ」

「馬鹿あ？」

そういうえば、あたしはキュレオリアのコト、ほとんど知らなかつたな。

死んじやつた人のことって、あんまり聞けることじやないし、特に近しい人には。

でも馬鹿っていうのは聞き捨てならないね。

だって認めたくはないけど、あたしの前世だっていうし、一応今はキュレオリアの体になつてるワケだしさ。

あたしが軽く睨むと、將軍は嘲るような笑みを浮かべた。

ムカつく！

「ああ、知らないのかな？ キュレオリアは愚かにも人間に恋をしてね。その人間をかばつて死んだんだよ、でも結局、その人間も助からなかつたんだけどね。本当に愚かな女だったよ。王姉という身分も捨てて男に走つたのだから」

「人と恋に落ちることの、何がいけないんです？」

「だって人は愚かで、すぐに死ぬじやないか。大体長生きしても八十年くらいしか生きられない。そんなのと交わつたら、誇り高い魔族の血が穢れるよ」

ホントに、將軍はそう思つてるんだろう。

血が穢れるつて言つた時、ホントに汚いモノを見るような目をした。

こんなヤツを爽やか將軍だとか言つてたかと思うと、自分の人を見る目になさに泣けてくるね。

いくら顔がよくたつて、一方的な考え方しかできないヤツはゴメンだ。「こっちの人間がどんなだかなんて、会つたことないから知らない。けどね、あたしも十九年間、人間として生きてきたんだよ。そこまで人間を馬鹿にされて、大人しく黙つてるとでも思つてんの？」一月も側にいたのに、そんなことも分からぬなんて、あまりにもあたしをなめてるんじやない？ いい加減にしろよな。

「でもチトセ、君は賢いだろ？ 一月を過ごして分かつたよ。一緒にこの国の霸權を握ろう」

「ふん、そんなに権力が欲しければ、反乱でも何でも起こせばいい。自分の手で陛下を討てば？ 將軍は武人なんでしょう？」

「それは無理だよ、チトセ。君は何故この城が浮いているか知ってるかな？」

「いつも移動して、しかも空を飛んでる城なら、外敵や逆賊から守るのに有利だからでしょ」

「うん、正解。では、こんな巨大な城を動かす動力は何だと思つ？」

「えーと、この国の動力の半は魔力。

石油はないらしい。石炭くらいはあるのかも知んないけど、この国じゃ使われてない。

一般的の魔族はランプとかロウソクを使ってるんだってさ。

そもそも、電気や熱でこんなデカイ城が飛ばせるとは思わないけどね。

羽根もプロペラもないんだから。

「やっぱり、魔力しか考えられないね」

「そう。しかも魔王の魔力だ。だから代々の魔王は魔族の中でもっと魔力の強い者になるんだよ。余剰を蓄えているから、魔王が急死しても一年くらいは大丈夫だけど、その余剰魔力を使い切つたら、この城は落ちるよ。ちなみに俺にはこの城を支えるだけの魔力はない。だから一番いい方法は、魔王を裏から操ること。その為には陛下の弱点を押さないとね」

「その弱点があたしだつていうのね」

ちなみにこれは問い合わせなくて、確認。

將軍はなぞなぞを解いた小さい子どもを見るような目で笑う。

マジで馬鹿にするにも程があるつちゅうの。

「俺が欲しいのは権力だ。兄がいるから領地は継げない。腕に自信があつたから表の十將軍にまで登りつめたけど、將軍は国政にまでは口を挟めない。あの大臣たちはフェイの手の者と君が言えば、陛下は信じてくださるじゃないかな。フェイのヤツを宰相の座から引きずり落とし、裏の十賢者の証を剥奪し、追放する。俺が初の將軍職からなった宰相で君が王姉。一人でこの国を牛耳ろうじゃないか。君とならきっと出来るよ。君だつてもつと贅沢したいだろう？ 元

の世界の話をよく話してくれたけど、向こうではただの庶民なんだ
わ？ 本当に戻りたいのかな？ 戻らなきやならないと、そう思
い込んでいるだけじゃないのかな？」

将軍はこの漆黒の長い髪をすきながら、熱っぽく語る。

多分、キコレオリアが生きてた頃から抱いてたんだろう夢物語を。でもね、やっぱり将軍は分かつちやいないね。

あたしはワザと皮肉な笑みを浮かべて将軍を見上げた。

「 そう将軍は言うけどさ、そんなに上手くいくと思ってんの？ あのジユトーの兄さんが黙つて追放されるワケないじゃん。それに魔王陛下がそんなウソに騙されるような可愛い性格してるってマジで信じてんの？ んなワケあるかつての。そんな中身も可愛かつたら、あたしはとっくに元の世界に還ってるよ。の人たちにや、可愛いカケラもありやしないよ、特に政治に關してはね。そんなこと、会つて一月のあたしより、長い付き合いの将軍の方がよく知つてると思つたんだけど、あたしはあんたのこと、どうやら買いかぶり過ぎたみたいだね。あーあ、野心だらけの男つてやだね。自分の都合のいい風にしか考えられないヤツは特にな。悪いけど、あたしはそんなに権力に飢えたりしてないもんでさ。むしろ気ままな一般ピープルの方がいいや。王姉殿下スマイルつて、顔疲れるんだよね。お上品な喋り方はムズがゆくなるし。あたしはそんな柄じゃないってさ。大体、この世界にはテレビもパソコンも漫画おもないんだよ。この世界もいい所たくさんあると思うけど、あたしはあっちの世界も好きなの。そりや、いじトコばかりつてワケじゃないけどや。そんなに捨てたもんじゃないつて思つてるからね。つまり、答えはノー。分かる？ あたしは協力しないよ。やるなら一人でやるんだね」

「 断るというのか？」

「 そうだよ。将軍は大人しく部屋を出てくべきだと思つけど？ これ以上罪を重ねても、いいことは一つもないでしょ」

将軍は信じられないつて顔をする。

彼の辞書には、権力を欲しない者は皆愚か者つて載つてゐんじゃな

い。

そんな偏った辞書なんて、使いモノにならないと思ひなげ。

「……致し方ないな」

「ちょつ、何すんだよー」

将軍があたしの体をまたぐ。

今までには左手であたしの両手を頭の上に押しつけてはいたけど、将軍の体は横にあつたんだよ。

いや、でもつ、ちょつと待てやー、これつてもしかして、貞操の危機つてヤツですか！

「なあ、チトセ。考え方ないかな？ チトセは顔がいい男が好きだろう？」言つことを聞いてくれたら、手荒な真似はしないよ？」

将軍はそう言いながら、右手で弄んでいた長い黒髪に歯を落とした。はつ、今更そんなキザなマネされてもね。

「乙女の部屋に不法侵入した時点で、そんなこと言つ資格はないんだ、よつ！」

今だ！

あたしは右足を思いっきり振り上げた。

「っしゃあ！ 手ごたえアリ！ クリティカルヒット！」

あたしの両手を押さえつけていた左手が離れた。

将軍は股間を押されてうずくまつてゐる。

はつはつは。いくら魔族とは言え、そこはダメでしょ。女をなめると、痛い目に会うつてことを学習するんだな！

あたしはその隙に将軍の下から這い出して、ベッドから転げ落ちた。念のため近くにあつた椅子を持ち上げて、将軍に投げつける。けどそれは将軍の数十センチ手前で何かに阻まれて砕け散つた。

「げつ」

ヤバッ、結界つてヤツ？

逃げなきや！

くるりとドアに向かつて猛ダツシユ。ドアノブに手をかける。つて、ちょつと待て！ また開かないんだけど！

ドアノブがビクともしない。

くそつ、またか！

「無駄だよ、チトセ。かけた者しか解けないまじないをかけたからね」

その声はすぐ近くから聞こえた。

振り返れば冷たい眼をした将軍が立っていた。

声の調子は変わらなくても、そこに感じる温度は絶対に低い。

「なるほどね、あたしは袋の中のネズミつてワケ？」

「そう、そして俺がネズミを捕まえる罠をしかけた魔族様だよ」

「ふん、猫じゃないの？ 権力つて大きな魚を身の程も知らずに獲りうとしてる猫」

ぐあはつ。

いきなり首を絞められた。

くつ、息が。

「お前はやはり愚かだな！ いくら生まれ変わったとも、その愚かだけは変わらないらしい！」

何か言い返そうにも、首を絞められちゃ、息をすることが難しい。

ヤバッ、落ち着け、あたし！

ジユトーの兄さんの言葉を思い出せ！

集中！ 田の前にあるモノに意識を集中させて、一気に開く感覚！

ざわりと長い黒髪がうごめく。

せめて意識が続いている内に、コイツを叩きのめさなきや気がすまない！

あたしの意識が途切れるのが早いが、コイツを叩きのめすのが早いか。

うう、段々目がかすんできた。

その時、直接脳に響くような声がした。

「

上手く聞き取れなかつたけど、それと同時にまた魔力が暴走を始めた。

つーか、嵐？

周りのものが舞い上がり、追跡装置でもついてるみたいに将軍曰
がけて飛んでいく。

あたしの首を絞めていた将軍の手が離れる。

そして、あたしの意識は深い底に落ちていった。

そこは真っ白「トコ」だった。

目の前にいるただ一人を除いて、そこに色はない。

「やつほー、チトセ！ 初めまして、かな？」

「あなたがキュレオリア？」

「うん、そう。キューちゃんでもレオちゃんでも好きなように呼んでね」

ちょっと待て、こんなにテンション高いキャラだったのか？ キュレオリアって……。

大人しそうな外見してるクセに。何か力が抜けたな。

「……あなた、さつき何か力貸したでしょ」

「うん。だつて絶体絶命の大ピンチだつたじゃない？ 普通はああいう所でカツコイイ王子様とか従者とかが助けに入るのが王道だと思うんだけど、それも望めなかつたんだもん。ちょっとくらいなら、いいかなあつて」

「いいかなあつて、オイ。あんた、ずっと見てたワケ？」

「まさか。ずっとじやないよ。ビューが私を起こそうつしてした時からかな？」

「それつて、ほぼずつじやん。つーか、何で出てこなかつたのさ。陛下はあんたに会いたがつてたんだよ」

「あはつ、そうみたいだね」

「あはつ、つてあんたね」

「だつて、私もう死んじやつてるんだもん。もう四十年も前にな。

今はチトセが私の魂を持つてるワケじやない？ 私はそんな出しゃばりじやないもん」

「ふん、あつそう。つーか、あんたがあのワガママ自己中を育てたんでしょ？ 一言、文句言わせてもらつからね」

「うーん、『めんねえ。でもビュー、普段はしつかりした子だよ？』

「……知つてる」

いくらあたしに会いに来ても、公務だけは絶対手を抜かないって、ジユトーの兄さんが言つてた。

そしてキュレオリアが、ちょっと困つたような顔をする。

「結局、私がビューを捨てちゃつた形になるしね。いくらビューが魔王になつた後とは言つても、なつてからの方が寂しかつたと思つし、何度も謝つても足りないくらい、悪いと思つてるよ」

「それでもいい、恋だつたの？」

「うん。私は後悔してないよ。権力なんかより、あのひとの方が大事だつたんだもん」

「相手、人間だつて？」

「うん。旅人でね、行き倒れてた所を私が見つけて、地上の別荘で看病したの。その後はもう、恋に落ちるつてこいつことなんだつて思つたくらい唐突にね、好きで好きでたまなくなつちゃつて、でもすごく悩んだんだよ。私は魔族で、しかも魔王の姉でしょ？　これでも結構魔力強いんだよ。寿命は多分、あのひとの何十倍もあつたと思う。結局、一人して死んじゃつたけどね。あのひとね、東の人間の國の王弟だつたんだつて。兄王に追われて、この国まで逃げて來たけど、追つ手に見つかっちゃつてね。次に生まれ変わる時は、あのひとと同じ人間に生まれたいなあつて思つてたら、本当に人間に生まれ変わっちゃつて、起きた時びっくりしたもん」

「……いいの？」

「何が？」

「だから、ホントにあんたが表に出なくて」

「やつだなあ、チトセつたら。いいつて言つてるでしょう？　それにあるひとがいない世界に生きてもしようがないもん。このまま何度も生まれ変わつてたら、きっとあのひとにまた会えると思うんだ」

そう言つうキュレオリアの目は、キラキラ輝いて、なんか眩しい。ちょっと羨ましいんかな、あたし。

「私はチトセと同じ魂だけど、同じひとじゃないよ。核が同じだけ。

ビューもそれを分かつてると思つよ。自分を捨てた私より、きっとチトセのことが大事だよ、今は」

「それ、微妙に嬉しくない。あたしは「」いつも嫌いじゃないけど、

帰りたいんだつてば」

「う～ん、ビューやの姉としては、残念つて言つておくね。つて、そろそろかな」

「は？ 何が」

「あのね、私は本来は眠つてるつていうのかな？ そういう状態なの。なのに無理矢理起こされちゃつて、一つの魂が一人の人格を動かすのつて負荷が結構かかるのね。魔力も私が使っちゃつたし、そろそろまた眠る時が来るの」

「お別れつてコト？」

「だから違つてば。私はチトセの中にいるから。でもも「」出でこないよ。多分、私が眠つたら姿も元に戻るんじゃないかな」

「ホントに？」

「うん。あれは私を起こそうとして、私が拒否したから体だけ起こされちゃつた状態なんだもん。あつ、そうそう。一つ、チトセに頼みごとしたいんだけど、いい？」

「内容によつてはね」

「大丈夫だつて、そんなに難しいことじやないもん。手紙をね、渡して欲しいの。今チトセが使つてる部屋の、白い鏡台のひきだしの奥にあるから。それをビューやに渡して欲しいんだ。四十年前、渡せなかつた手紙」

「オッケ。分かつた。渡せばいいんでしょ？」

「有難うチトセ！ ジヤ、そろそろ眠るね。最後にチトセと話が出来て良かつたよ。ふつつかな弟だけど、よろしくね！ 根は悪い子じやないから！」

「ちよつ、待てや！ コラ！ 消えるな！ よろしくねじやねえだろ！ オイ！」

「あはははは、ば～いば～いき～ん」

「いや、マジであなたが起きたのはあの時か！ だったら何で、いつもあんぱんにマトロンパンにやれてるばいきん野郎の捨てゼリフが言えるんだ！？」

つねり、引つ張られる。つーか弾き飛ばされる。

古事記

ふつと、意識が浮上する感覚。

気持ち悪さを堪えて目を開けると、陛下のビアップがあつて、マジでビビった。

「あ、あ、あ」

「あ？ 何？ あんぱんでも食べたいんですか？」

「姉上！」

「ぐはっ」

「良かつた。姉上が無事で本当に良かつた！」

「ちょっと待て！ 苦しいから！ マジで苦しいから！ んな抱きつかな！」

毎度毎度同じ口で言わせんなよな！ あなたの力は普通の五歳児並みじやないんだつーの！

「気がついたか」

「あ、宰相閣下」

陛下に抱きつかれながらも、何とか体を起こすと、いつもに輪をかけたように不機嫌なジューの兄さんがため息をついた。

「あ、宰相閣下ではない。かなり派手にやつたようだな」「え？」

「あー、こりゃひでえや。」

大型家具があつちこつちにちりばつてるわ、壁に大穴開いてるわ、もうぐつちゃぐちゃ。

もしかしないでも、これやつたの、キュレオリアの魔力だよなあ。

「……弁償とか、しなきやダメですか？」

そんな金、持つてないんですけど……。

そういうと、兄さんはまた大きなため息をついた。

「そんなことは気にせずともいい」

「そうだよ。姉上が無事だったのだから、それだけで十分だよ。」

めんね、もつと僕が気をつけていれば、こんな日に会わなくてすんだのに……」

あああ、またそんな涙浮かべて。

君主がそう簡単に涙なんて見せるもんじやないって。

大体、もう百六十歳なんだからさ。

「別に、そんな気にしなくても大丈夫ですよ。結果オーライってヤツです」

いくらかはあたしがもつと気をつけておかなきやなんなかつたコトが原因だつたし。

なおも抱きついてくる陛下をひつぺがし、寝間着の裾を払う。

そして目に入つてきたのは、長い黒髪じやなくて、肩口までの茶髪。

キュレオリアの言つた通りだつたみたいだね。

う、キュレオリアの服、胸の辺りがゆるくて、腹が苦しい……。何かムカつくな。

久しぶりの自分の顔を、倒れてる鏡台のひび割れた鏡に映す、何だか氣恥ずかしいもんだ。

つと、そうそう。

白い鏡台つてコレだよな。

よつと。

ひきだしを全部引っ張り出して、散らばつた中身の中に、黄ばんだ封筒を見つけた。

まあ、四十年もこの中に入つてたみたいだし、元は白かつたんじやないのかね。

宛名は“親愛なる弟、ビュレフォースへ”。

裏にはキュレオリアのサインが入つてゐるし、コレで間違いないな。ハイと手渡した手紙とあたしの顔を、陛下は交互に見る。

「姉上？」

「そう、コレ、陛下の姉上から」

「え？」

「だからキュレオリアから、陛下に宛てた手紙を渡してくれるように

に頼まれたんですよ」

「姉上が……」

陸トはその手紙をじっと見つめていた。

結局、あたしはその手紙の内容は知らない。

けど、まあ、多分それは他人が知つていいことじゃないんだわ」と
思つ。

そして、その後の顛末を少しだけ。

まず、ピロツツ将軍のことからかな。

将軍はキュレオリアが魔力で壁に大穴開けた音で駆けつけてきた兵士たちに取り押さえられたらしい。

まあ、彼らが駆けつけてきた時には、あたしも将軍も氣絶してたんだけどね。

処遇はまだ決まってないけど、かなり大きな計画を立ててたらしくて、彼の仲間たちも続々と捕まってる。

ちなみにこれはあるお菓子に似た名前のオッサンたちが吐いた情報による。

将軍は一切口を開かず、黙秘を続けているみたい。

国外追放か終身謹慎か。死刑にはほんの少しだけ、罪状が足らないらしい。

普通にうつ中世っぽい世界だと、反逆者は皆死刑のハズだけど、この国にも死刑反対論者が結構いるとのこと。

まあ、あたしも死刑にはして欲しくないと思つてるからね。

将軍のしたことは許せないっていうより、馬鹿げてたと思うから。その辺は司法の手に委ねられるでしょ。

ジユトーの兄さんは相変わらず不機嫌そうな面して、忙しそうに仕事をしてる。

一斉検挙したヤツの穴埋めとか、後任とか、あとこまいましたことが色々と。

それでも合間をぬつて、またお菓子を作つてる姿は、悪いけどやっぱ笑えるよ。

エプロンが世界一似合わない男の称号を贈りたいね。

あ〜、あとは、陛下？

アレも相変わらずだね。姉上姉上つてマジうるさい。

でも時たま、あたしのこと、チトセって呼ぶようになった。

その代わり、自分のことはビューッと呼べってうるさいんだよ。

あと敬語禁止令が発令中。

まあ、そう簡単に言ひ口ト聞いてやるよりは可愛い女じゃないんですね。

未だに陛下って呼んでマス。

そして迎えた元の世界に戻れる日が今日だ。

こっちに来てから苦節一月と十四日。

こうして数字として見ると短いけど、結構濃い一月ちょっとだったなあ。

絶対、現代日本じゃ味わえないような経験ばかりだったからね。したくてしたワケじゃないけどさ。

楽しくなかつたって言えば嘘になるんかな。

ジユトーの兄さん他、お世話になつた人たちには、もう別れの挨拶は済ませた。

召喚魔術って、代々の魔王にしか伝えられない秘術だとかで、他人がそこに立ち会うことは出来ないんだって。

あ？ 何で陛下があたしを元の世界に戻す気になつたかつて？ なんでも、自分が未熟なばかりにあたしを危険な目に合わせたから、もつとしつかり国が治められるようになるまで、自分の世界で待つて、とか勝手なことをぬかしていやがりましたけどねつ。 なんでこっちに帰つてくること前提で話すかね、あれは！ ホントに皿の中だなあ、オイ。 まあ、もう、慣れちゃつたけどや。

「準備できた？」

「え、まあ、ね」

そつと部屋のドアを開く。

半壊させちゃつた部屋はまだ修理中だから、寝泊りしてゐるゲストルームで着替えた。

何でも時空を渡つて來た時となるべく同じカツコの方が、還りやす

いんですと。

でも、ねえ、来た時のカツコつて言つたらさ、高校時代のジャージに前髪がウザイからつて、パイナップルみたいに結んでるつていう、絶対人前にや出られない姿なんですけど！

うつ、恥ずかしい！

あまりに恥ずかしいから、頭からすっぽり白いシーツを被つて出た。後姿は、某毛が三本しかないお化けのようだよ。

あー、このネタが分からぬお嬢ちゃんやお坊ちゃんは、お父さんかお母さんに訊くように。

「ねえ、チトセ。やつぱり帰つてしまつんだね」

あたしが召喚された魔方陣がある城の地下への道すがら、ぽつりと陛下が呟いた。

つーか、あたしにはこのカツコをツツコまないアンタの方が気になるけどな。

「仕方ないでしょ。あたしが生まれたのはあつちなんだし。それにこの国じや、多少なりとも魔力がないと生活すんのが大変なんですよ？」

あたしはもう身も心もただの女子大生、尾上 千歳でしかないから、もう魔力なんてないハズだもんね。

「あ、あのね、チトセ。それがそうでもないみたいなのはあ？」

陛下がまた変なことをほざき出したんですけど。
だからそんなもじもじすんなつづーの。

「言いたいことはハツキリ言え、ハツキリ」

「うん、じゃあ言つね。確かにチトセの身体は外見は元に戻つたけど、一度引き出された魔力はそのままになつてしまつたみたいなの。身体はまだ人間に近いけど、このままだと……多分あと五年くらいで、身体も完全に魔族化してしまつと思つ」

「……ちょっと待て、それって……つまり……どうこつコトア？」

スンマセン。あんまり理解したくないんですけど、その言葉の意味。

脳が理解するのを拒否ってるよ。己防衛機能つてヤツ？

「ん~、具体的には歳をとるのが遅くなったり、ちょっと身体が丈夫になつたり、魔術が使えるよつになつたりかなあ？」

「マジでえ！？」

「うん、マジで」

「うつそ！ 何ソレ！ あり得ないんだけど！」

「それって、向こうつ還つても有効なワケ！？」

「多分。だつて世界の理とかに関係ない身体に直接起つた変化だから」

「……ねえ、魔力を封じる方法とかないの？」

「ないよ」

「んなわらつと言つたな！ わらつヒー ホントはあんだろ！ 隠し立てするとヒドイからな！」

あたしがそう言つと、陛下はその可愛らしげお顔に満面の笑みをたたえた。

しかもイジワルな笑みだ。

初めて見る顔にあたしは嫌な予感を覚えたよ。むしろ悪寒か？

「な、何さ」

「ううん。ただ例え仮にそんな方法があつても、きっと教えないと思つて」

「はあ？ 何でさ。一国の王がそんなケチくさいコト言つんじゃねえよ」

「だつてね、チトセが魔族になつたら、こっちに来るしかないのでしょ？ チトセのいた世界は人間が支配しているんだつていうからね。それとも、向こうでこそこそ隠れて、あちこちを流転する生活を送りたい？」

「こ、こ、コイツ！ もしや確信犯か！」

くそつ、コイツの頭を思いつきし殴りてえ！

でも今殴つて機嫌損ねたら、還してくれなくなるかも知んないし！
我慢、我慢だ、尾上 千歳。

例えいつか時の流れが違っちゃって、こっちの世界に来なきゃなんなくなつても、今はあの世界に還りたい。
向ひでやりたいことはたくさんあるんだからな！

陛下に案内されてやつて来た地下室は、記憶通りに陰氣でかび臭い。

「もつと綺麗にすればいいじゃん。金はあるんでしょ……『わやつ』
うへつ、またガサゴソいつてるよー」

まさか黒光りしてゐアレが出るんじやないでしょうねー。他にも茶
色かつたりするアレが！

陛下が魔方陣のチェックをしながら答える。

「でもこちらの方が雰囲氣出るから。いかにもつて感じでしょー?」

雰囲氣かよー！

つて、ひーつ、何アレ！？

「あ、そっちの方は魔術の道具だから、触らないでね
変なモノばかりが並んでる棚に、いわゆるしゃれにうべを見つけて、
ちよつとビビッた。

もつと平たく言うと觸體しゆたい、正しくは頭蓋骨とうがいこつか。

暗くて陰氣でかび臭い地下室で見ると、かなり怖いよ。

つーか、何でこんなモンがあるんだ？　まさかホンモノじやあるまいなー？

……深く考えるの、よそつ。

うん、何か取り返しがつかないことになつたんだ。

「チトセ、準備できたよ」

「う、うん」

地下室の床には、畳一畳分くらいの魔方陣がチョークみたいので描
いてあつた。

「あ、チトセ。魔方陣に入る前に、これあげるね」

そう言つて陛下は自分の指にほめてた指輪を、あたしの中指にほめ
よつとした。

「きっとチトセのことだから、向ひ戻つたからのこと夢
だつたとか思うでしょ？　だからやんといひのことが現実だ

つたつて証拠をあげるね

ちつ、あたしの性格見破られてるよ。何か、シャクだな。
つて、いたたたたたた。

「無理矢理はめようとするな！ どう見ても指の太さ違うだろ？ が
！ まず外見五歳児がしてた指輪を、十九のあたしにはめようつて
考えが無理なんだよ！」

試しに小指にもはめようとしたけど、絶対無理だね。入らないって。
「痛いつつてんだろ！」

「だつて……」

もう、そんなコトで泣きそうな顔すんじゃないよ。つたぐ。

あたしは陛下が持つてた指輪を受け取つた。

「向こう着いたら、チーンでも通してネックレスみたいにするか
ら、それでいいでしょ？」

それまでは握りしめて、絶対離さないから。

陛下は袖口で顔を拭つて頷いた。

「うん。じゃあ、始めよう。チトセ、円の中心に立つて」

「ハイよ

それまで被つてたシーツを取つて、言われた通り、魔方陣の真ん中
に立つ。

やつと還れるんだ。日本に……。

近い内にあたしは向こうの世界に相容れない存在になる。
でもそれまでは、一生懸命生きたらうじやないの！

「じゃあ、行くよ？ 準備はいい？」

「モチロン」

陛下があたしには聞き取れない、呪文みたいのを唱え始める。
それと同時に、ビリビリしてきた。

何だから、ひっぱられて、力を貯めてるような……。

「じゃあ、また会おうね、チトセ」

「じゃあね……ビューー」

しばらくはお別れなんだし、特別サービスだよ。特別！

だからそんな嬉しそうな顔すんなっつーの！
こっちが恥ずかしいだろ！

「はっ」

「うおっ」

気合の声と同時に、あたしは宙に放り出される感覚を味わった。
ぎやあ！ かなりの加速度だよ！

何だっけ！ こうこうのー、えーと、えーと、あつ、あれだ！
逆バンジー！

来る時垂直落下式スリルライドで、帰る時は逆バンジーかよ！
あり得ねえ！

すぽーんと何かを抜ける感覚のあと、気づけば自分の部屋のパソコンの前に、あたしは何事もなかつたみたいに座つてた。まるで長い夢でも見てたみたいに。

でも、やっぱりあれは夢じやない。

何じひ、あたしの手の中には、例の指輪があつたんだからね。

目の前のパソコンはスクリーンセイバー画面だつた。

おつかしいなあ。あたし、一月も行方不明になつてたんだから、とつくに電源切られていいハズなのに。
あつ、もしかして……。

あたしはネットにつながつてることを確認して、現在日時を調べた。

「……やっぱり」

あたしがあつちに行つてから、まだ六時間くらいしか経つてない。
あれか！ 異世界ファンタジーお約束の、向こうこうしちぢや時間の流れが違つてる法則！

ははは、なんだあ、そつか。一月もどこに行つてたのかつて、問い合わせられなくて良かつたよ。

ちょうどその時、カーテンの隙間から光が射し込み始めた。
おう、夜明けか！ 久しぶりに浴びる日本の朝日は格別だね！
ん？ ちょっと待て、今日があの日だつことは……。

「レポート提出日じゃん！」

ヤバッ、あと何時間！？ しつ、資料！ ワードファイル、どれ！？
これ、落とすワケにはいかないからね！ 単位は大事！ 全力で書き上げるぞ！

さあて、元魔王陛下の姉、今大学生で、もうすぐ魔族の底力、見せてやろううじやないの！

あたしは猛烈な速さで、キーボードを叩き始めた。

そして……。

「わやふ
つつ、痛つてえ。

「この感覚、一度田だよ。

垂直落下式スリルライド。ただし安全バーも座席もないバージョン。別名召喚とも言う。

実に六年ぶりだね。また見事に着地に失敗して、腰打つたし。

「チトセ…」

「おつ……つて、誰？」

この美少年と美青年の中間くらいの、一番オイシイ時期の美形さんは。

尻餅ついてるあたしに手を伸ばしながら、その美形さんが笑う。

「あれ？ 分からない？ 僕だよ、ビロー、ビュレフォース」

「ええつ、陛下！？」

うつそお！

立ち上がったあたしより、拳二つ分くらい背の高いこの美形さんが、あんなあたしの腰ちょっとと上くらいまでしかなかつた陛下！？

魔王の陛下は百六十歳で外見五歳児だった。

じゃあ、あつちでは六年しか経つてないけど、こつちの世界は一体何百年経ったのさ！

あんぐり口を開けて見上げるあたしを、陛下は頭からつま先まで見回して言つ。

「チトセは全然変わらないね」

「あ、当つたり前でしょ！ 向！」ひじや六年しか経つてないんだから…」

「へえ、そなんだ」

「へえつて、あんたね…」

「うこうう人を食つたような所は全つ然変わらないな！」

あたしは怒つてゐるのに、陛下はくすくす笑つ。

つたく、ますます腹立つな！

「いつちじや大分経つちゃつたから、チトセがお婆さんになつてゐんじやないかつて、ちょっと心配だつたんだけど、杞憂きゆうだつたみたいだね。まあ、僕は例えチトセがお婆さんでも、全然構わないけど」

「うわあ……」

甘つ、何その砂吐きそくなぐらに甘いセリフ！
めちゃ痒い！ あたしダメだわ！ いつこのー！

何気に引き気味のあたしを気にせずにして、陛下はひょつと困つた顔をする。

「何を」

「うん。あのね、いつの都合でチトセを呼んでしまつたけど、大丈夫？」

へえ、そういうコト気にするよひになつたんだ。

前回はそこんどい、まったく無頓着だつたからな。少しさは成長したじゃん。

「ん、まあね。いざれこつちに来なきやなんないつてことは分かつたし。いつこつち来てもいいように、手紙書いてあつたから」
その手紙は分かりやすいように、あたしがいつも使つてる棚のひきだしに入れてある。

何とか助手として残れた大学や、家族や友達にはいきなりの失踪で迷惑をかけるかも知んないけど、少なくともそれは自分の意思だつてコト、伝えなきやだし。謝罪と感謝の言葉を、自分の言葉で綴つたつもり。

まあ、魔力だとか魔王だとか、そんなコトは伏せたけどね。絶対信じてもらえないって。

結局、こつちのコトは誰にも言わなかつたしな。

いつも首からチヨーンに通した指輪を提げてたら、結構詮索されたけどね。意味深に笑つておいたけど。

「でもや、あたしこつちに來ても、今度は王姉つて立場ないから、

まず住むトコと仕事探さなきゃね。陛下、何かいい物件と仕事ない?
？」

そう尋ねると、陛下は不満気な顔をする。

「城に住めばいいよ。仕事もしなくていいから」

「そんなワケにはいかないでしょ！ 少なくともあたしは嫌だね、そんなの。タダ飯食いなんて真つ平ゴメンだよ。そんなコトになるんだつたら出てつてやるから」

「だ、ダメだよ！ それじゃ呼んだ意味がないよ！」

「じゃあ、紹介しなさいよ」

「……分かつた。ジユトーに空いてる城の仕事ないか訊いてみるよ」「あ、そうそう。ジユトーの兄さん、元気？ ついでに今、外見いくつくらい？」

爺さんになつても、あの人はカッコよさそうだけど。不機嫌な面は健在かね。

「元気だよ。宰相として頑張つてくれているし、作るお菓子は美味しいし。外見？ 人間でいうと……ええと、四十代半ばって所かな？」

「へえ、まだ菓子作りしてるんだ……。四十代半ばのナイスミドルがエプロン姿でお菓子作り……。それは是非とも拝見しないとね！」「さあ、陛下、さつさとこの陰気な地下室から出よ、こんなトコに長時間いたら、カビ生えちゃう」

「また陛下つて言つた。ジユトーつて呼んでつて言つているのに……」

「聞こえないなあ。何か言つた？」

「あの時は呼んでくれたじゃないか」

「まったく何も聞こえませーん」

地上への階段を上りながら、あたしはワザとしゃつしゃつた。

あの時は特別サービスだつたんだつてば。

背後からむつとした気配が伝わってきたけど、振り返つて何かやんないもんね。

「わわわー。」

いきなり背後から抱きしめられて、階段から落っことなる。

「何すんだよ！ 離せ！」

「えー。だつてチトセつてば、全然再会を喜んでくれないのだもの。僕はこんなに嬉しいのに！」

ますますぎゅっと力を込めてくる。

けど苦しくはない。どうやら手加減も覚えたらしい。

でも、いきなりなト「は変わってねえな！

「離せつてば！ 階段でふざけちやいけませんって、小さい頃教わらなかつたのー！」

「……ちえ」

はあ、やつと離してくれたよ。油断も隙もあつたもんじゃないね。再び階段を上り始めたあたしの背中に、陛下が問いかけてくる。

「ねえ、チトセはまだ僕のことを弟だと思つてる？」

「相当手のかかる、ね」

あたしは階段を上りながら答えた。

あの時は弟だなんて認めてないつもりだつたけど、後から考えたら結構弟扱いしてたかもだし。

「僕はもうチトセと姉上を一緒にしないよ」

あたしの後ろをついてくる陛下に、あたしは振り返らずに答える。

「あつそう。だから何？」

それが普通なんだつてば。

「うん、だからこれから僕とチトセの新しい関係を築いていきたいと思つんだ」

「へえ？ 何？ 爵主と家臣？ ペットと主人様？ それとも友人関係？」

大穴で罪と罰、あるいは愛と誠とかつてね。

「違つよ。あのね……」

ボソリと耳元に囁かれた言葉に、思わず足が止まった。

振り返つて、あたしの数段下にいて視線が同じ陛下を睨みつける。

「はあ？ あんた熱でもあるんぢやないの？ もしくはとち狂つた？」

「まさか。僕はいたつて健康だし、正氣で本氣。チトセがいう所のマジ、かな？」

「……マジで？」

「だからマジで」

うわあ……なんつーか、恥ずかし過ぎる発言なんですけど。顔が熱くなるよ。

何！ この展開！ 口口まで王道どころか獸道もいいトコ走つてきといて、何で口口でいきなり王道な展開になるかな！

ちょっとどうなつてんだよ！ マジで！

固まつてゐるあたしの横をすり抜けて、陛下が上に上る。

あたしに手を差し伸べながら、陛下は不敵に笑つて言つた。

「僕は諦めが悪いから、覚悟してね、チトセ」

あたしは大きなため息をついて、その手を取る。

フリをして思いつきり叩いた。

ベチツツといい音が地上と地下をつなぐ階段に響く。

「ふん。あたしがそんな簡単に落ちると思つたら大間違いだからな」

「それでこそチトセだね。落とし甲斐があるよ」

はああ、今思えば、あの小さい陛下はまだ可愛げがあつたな。

精神は外見に比例するつて言つてたけど、大分ふてぶてしくなつちやつてまあ。

手をさすつてゐる陛下の横をすり抜けて、あたしは階段を上る。地上への出口は、もうすぐそこだ。

始めは唐突に告げられた、魔王サマがあたしの弟だつて。でももう彼はあたしの弟ぢやないつもりらしい。

じゃあ、これからはどんな関係に？

少なくとも、そう簡単には、陛下の言ひ通りの関係になんかなつてやんないけどね。

え？ あの時陛下に何て言われたかって？

アレをあたしの口から言わせる氣なワケ？ 無理無理。つーか、絶対ヤだ。

だつて口にするのは恥ずかしいし、言つたらホントにやうなつそうで怖いしね。

だからそれは、皆様のじ想像にお任せしますわ。これからのお展開もね。

まあ、退屈だけはしそうになつてことは、予想できるナビや。そんなワケで、また機会があつたら会いましょ。未来のコトなんて、まだ分かんないけどね。

皆様、Good-bye！ 再見！ セヨウナリ！ つこでにば～いば～いき～ん
また会つままで！

宰相閣下の優雅な一日は、日の出と共に始まります。山の端に太陽の頭が少し出たのと同時に、パチッと田を開ける様は、まるでからくり人形のようですが、閣下はまだ独身でいらっしゃるので、その恐ろしさに気づく者は他におりません。

節約をむねとする宰相閣下でいらっしゃいますから、朝の身支度などは、当然全てじ自身でなさいます。

ちなみに朝餉は専属の料理人が腕を振るうのですが、パンだけは毎日閣下が前の晩から準備をして焼かれるのだそうです。

そのパンは魔王陛下の食卓にまで並びます。

閣下付きの料理人がそのパンの製法を、どうにかして会得した暁には、そのパンを売つてぼろ儲けしようと企んでいることを閣下はご存知ありませんが、まあ、それはどうでも良いことでしょう。それほど閣下がお作りになるパンは、美味しいということです。

さて、閣下が朝餉を終えられて執務室に向かつておられるど、広い廊下の向こうから、もの凄い剣幕でやって来る人影がありました。その人物は閣下の姿を認めるど、怒鳴りながら駆け寄つて来ます。

「あつ！ 居た居た。ちょっと兄さん！ アレ、どうにかしてよ！」

「……お早う」

朝っぱらからうるさいのが来たな、と閣下はお思いになりますが、とりあえず朝の挨拶をなさいました。

しかし相手は駆け寄つて来るなり、いきなり閣下の胸倉を掴んで前後に揺さぶります。

「兄さんから厳重注意してよね！ ホント嫌なんだから！」

「止める」

閣下は相手を刺激しないように、やんわりとその手を外し、ため息を一つついて、だいぶ背丈の違う人物を見下ろして仰いました。

「挨拶をされたら、返すのが礼儀だろ？」

「おはよー。つかホント聞いてよ兄さん！」

兄さん兄さんと呼ばれていますが、彼女は閣下の妹ではありません。それどころか、外見ならば父娘ほども離れています。

ついでに実年齢で言えば、確実に数十世代は違うでしょう。

まあ、人間年齢換算では、ですけれどね。

「まったく。少しばかり落着いて話したらどうなんだ、チトセ。また

陛下が何かなさつたのか？」

チトセさんは不機嫌な顔を崩さずに頷きました。

そして地獄の亡者がうめいているような低い声で訴えます。

「朝起きたら隣で寝ていやがった」

「……そ、そつか……」

閣下はすっと目をそらされました。

こういう時にどんな言葉をかければ良いのか、分からなかつたからです。

それは娘に初めて彼氏が出来たと聞かれた父親の反応に似ていなくもないですね。

しかし閣下の態度を見て、どんな想像をしたのか気づいたのでしょうか。

チトセさんはむつりとしながら言いました。

「ちょっと、変な想像しないでよね。まだやられちゃいないってば」「……頼むからもつと婉曲な表現で言つてくれ」

「何言つてんの。もう五百五十近いクセに」

はん、とチトセさんに鼻で笑われてしましました。

閣下は大きなため息をついて、首を振ります。

「私にどうしろと言つんだ」

「だ・か・ら、どうにかしらつってんの。具体的に言えばアレを

あたしの視界に入れないとどうして」

「出来ると思うか？」

「やつてよ」

「「」の間教えたまじないはどうした？」

「一応あれでも魔王陛下でしょ。んなモン役に立ちやしない」

その切り捨てるような口調に、自分も役立たずといわれたようで、閣下はこつそり傷つかれました。

「しかし、何故そこまで陛下を嫌う？　チトセは顔が良い男が好きなのではないか」

閣下は理解出来ないといつ風に、首を傾げます。

チトセさんが不細工などでもいい男の名前は、すぐに間違えたり忘れたりするくせに、顔が良い者の名は、どんな複雑な名前でも一度で覚えるといつことを「存知だからです。

そして魔王陛下は比類なきお美しさを誇る御方。

美形好きと自他共に認めるチトセさんが、何故陛下を厭うのか理解に苦しむ所です。

チトセさんは「あのねえ」とため息をついてから言いました。

「言つとくけど、あたしは目の保養として美形が好きなの。男女問わすね。別に面食いってワケじゃないんだよ。だから付き合うなら別。大体近くにあんなキラキラしたヤツがいたら、あたしが余計にかすむでしょ。あとすぐにベタベタしてくるトコが嫌。はつきり言つて、うつとうしいんだよね。小さい時はまだ可愛げがあつたけど、今は力ケラもないし。人のベッドに勝手に入つてくる神経なんて、絶対理解出来ないし、したくもないよ。ここがアメリカだったら、絶対に訴えてやる、ストーカーとしてな。で、半径何百メートル以内に近寄っちゃいけないって判決出してもらいたい。切実に。まあ、他にも色々とあるけどさ、つまりはタイプじゃないつてコト。分かつた？」

「あ、ああ」

びしつと鼻先に指を突きつけられ閣下は、女の容赦のなさを改めて思い知った氣がなさいました。

「……で、当の陛下はびいこりしあるのだ?」

「トセさんは肩をすくめて答えました。

「わあ? とりあえずベッドから跳落として、着替えるからって追い出しだ、ドアから出たらまた面倒なことになるから、ひつそり窓から飛び降りて来からさ」

こちらに来て一年になるトセさんも、だいぶ魔力の制御方法を覚えてきたみたいです。

しかしその主な用途は、魔王陛下から逃れるためのようですが。

「あ、トセ。こんな所に居たの?」

噂をすれば、なんとやら。

魔王陛下がトセさんのやつて来た方からひいこりしあります。それを見たトセさんは、

「げっ、じゃあ兄さん、あとよろしく!」

と言い残して、一田散に反対方向へ駆け出して行きました。

それを見送った閣下は、腹を決めて振り返りました。

そこには、先ほどからバチバチどころか、グサグサと刺さるような殺氣を醸し出している魔王陛下のお姿がありました。

「お早ひじやいます、陛下。今日もいい天気ですね」

会話に困った時には、天気の話題を出せばいいのです。

しかし残念ながら会話の奥の手は、陛下に通用しませんでした。

「お早ひじやー。ねえ、一つ聞いてもいい?」

「何で?」

「どうしてトセと話していたの?」

陛下は笑つていらっしゃいますが、田は全く笑つていません。

大抵のことでは動じない閣下も、背中に嫌な汗が流れるのが分かりました。

「いえ、たいしたことではありません。偶然会つて、朝の挨拶を交わしていただけですの」

「ふうん。ここはチトセの部屋から大分離れているけれどね。仕事場に行くにも通らないでしょ？」

「そういえば、セウドジジイますね。散歩でもしていたのではありますか？」

一時は焦つたものの毎度のことなので、閣下はすっかり立ち直してとぼけます。

亀の甲より年の功。

宰相なんぞを長年やつていると、面の皮も厚くなるというものです。まあ、いつもして朝のひと時は過ぎて行きました。

しかし、閣下の一日はまだ始まつたばかりです。

この程度では終わりません。

魔王陛下は政に私情を挟むようなお方ではありませんが、休憩時間には、閣下の淹れたお茶を飲みつつ、愚痴をこぼされることもあります。

「ねえ、ジユトー」

「はい？」

「どうしてチトセの職場は、執務室の近くではないのだろうね？」

この一年近く、毎日のようにぐるり返ってきた陛下の問いに、閣下は内心、

（またか）

と思いつつ、お答えになります。

「この城内で空いていて、且つチトセに合つた職場がたまたま書庫だつただけでしょう」

「……僕の秘書官でも良かつたのではない？」

実は閣下も陛下から圧力を受けて、チトセさんに秘書官にならないか、と打診をしたのですが、彼女は、

『はつ、冗談じゃない。あんなのと四六時中一緒にいたら、絶対神

経持たないつて』

と言つて、頑として首を縦に振らなかつたのです。

しかしそんなことを陛下に言へるはずもなく、閣下はもつともからしい理由をでつちあげました。

これも毎度のことですから言い慣れたもので、すりすりと出てきます。

「秘書官は足りておりますよ。それに書庫係も秘書官と同じくらべて大事な役田でしきう。今までの書類を全て保管してこらのですから。チトセが提案した書類分別法で、かなり書類が探しやすくなつたと評判ですよ」

後半は本当のことです。

チトセさんとしては元いた世界で学んだことを、応用しているだけらしいのですけれどね。

閣下はまだ不満をつにじている陛下を軽く無視して、『自分の仕事に戻られます。

何しろ仕事は山ほどあるのですから、いつまでも陛下のお相手ばかりはしてこられません。

「じゃ、さつと付けて、僕の方から行こうかな」

悪巧みを考えついた子どものように笑つ陛下に、新たな嵐の予感を感じ閣下はそつと目を閉じました。

(……頑張れ、チトセ)

心中で哀れな、それでもたくましい教え子に声援を送り、そして自分にもきっと回つまわつて被害が及ぶだらうことを予想し、閣下は嘆息なさるのでした。

幸薄い、ないすみじるな閣下の唯一の楽しみであり、息抜きなのが、午後のお菓子作りです。

服を汚さないよう前掛けをつける姿は年季が入つてらつしゃいます。

しゅつと紐を結ぶ様子など、奥様方がご覧になつたら鼻血ものですよ？

今日はこの間、チトセさんが作つてみせた、ふりんといつお菓子を作られるようです。

ただし、チトセさんが元いた世界とこちらでは、食材に違いがあるので、まったく同じもの、というわけには、いかないのだそうです。

さて、用意する材料は、キテンフォーの乳、同乳を濃縮した生くりーむ、グレンフィビスの卵、お砂糖、ベベラの実から抽出されたえつせんす、ウーベン酒です。

ちなみにチトセさんはそれを、キッキンブラボー、ベレッタヒッピー、ゴモラ、ウーロン、と呼んでいました。

どうこう耳をしているんでしょう、彼女は。覚える氣があるとは思えません。

まあ、それはさておき、閣下の特技として、一度作られたお菓子の作り方は絶対に忘れない、といつものがありまして、今回も書付など見ずしに、手際よく作られております。

その脇で数人の若い料理人見習いたちが、熱心に見学していました。そう、閣下は彼らの尊敬対象、お菓子作り界の星なのです。

おそらくお菓子作りにおいては、閣下の右に出る者はいないことでしょう。

何せ、年季が違いますからね。

人間の何十倍も長生きの閣下が蓄えた作ることが出来るお菓子の種

類は、実に数千種類とも数万種類とも言われています。

古今東西の菓子を作り続け、腕を磨き、たまに新作を発案する、閣下のお菓子への飽くなき情熱は、今すぐ宰相を辞めて菓子職人になつてしまえばいいのに、と思われなくもないほどです。

しかし閣下が辞職されるのは、宰相の地位にあれば珍しく手に入れるのが難しい食材でも、城に献上されることがあつたり、権力によつて手に入れやすくなるからという説がもつとも有力です。

さすがは閣下。計算高くいらっしゃいますね。

おや、型に入れたふりんを蒸している間に、もう一つお菓子を作られるようです。

実はふりんというお菓子は、作つてから一皿置いた方が卵臭さが抜けて美味しいのだと、閣下が見習いの料理人たちに説明しておられます。

へえ、そなんですか。作りたてじゃない方が美味しいこともあるんですね。ためになります。

閣下はあらかじめ寝かせておいた生地を取り出して、形を作つてゆかれます。

どうやらハバナンナという焼き菓子のようです。チトセさんはくつきーだと言つていました。

蒸し終えたふりんを魔力で稼動する氷室に入れて、ハバナンナを焼き始めると、閣下は使つた器具を、ご自分で洗われます。

いくら見学していた見習いたちが「自分たちが洗いますから」と言つても、閣下は首を横に振ります。

この辺りに閣下の几帳面さが現れているのではないかどうか。

自分の道具は自分で手入れをする。

その職人気質に、見習いたちは更に閣下に心酔していくのでした。

お菓子作りはその過程も楽しいのですが、やはり食べてもううつ時が一番でしょう。

閣下は焼き上がつたハバナンナを、いくつか見習いたちと味見をして、

意見や感想などを求めた後、茶道具一式と共に厨房を出られました。閣下は毎日、陛下のためにお菓子を作られるのですが、閣下の足は執務室とは別の方向に向かっています。

それは陛下がこの時間帯におられるのは、別の場所だと存知だからです。

城のある一角に、その部屋がありました。

重く頑丈な扉を叩くと、短い返事と共に扉が開かれました。

「宰相閣下、どうぞいらっしゃいまし」

「ああ、邪魔をする」

にこやかに閣下を出迎えた人物は、初老の女性でした。

閣下がお茶時にここを訪れるのは、一年前からの日課となっているので、彼女も慣れたものです。

手際よく机の上を片付けて、閣下が用意されるのを手伝います。

「いつもすまないな」

「いいえ。ちょうど休憩時間でいらっしゃりますからね。チトセ以外の者は出払っておりますし。それに、相伴にあずかれるのですから、こねぐらこのことは致しますわ」

「陛下も来ておられるのだろう?」

「ええ、奥にいらっしゃいます」

ちょうどその時、女性の示した扉が開き、隣の部屋から件の人物が顔をお出しになりました。

「ああ、やつぱり。いい匂いがしたから、そつだと思つたんだ」

陛下はにっこりとお笑いになると、後ろを振り返つて呼びかけられます。

「チトセ、お茶の時間だよ」

「……うー、今行きます」

首をベキバキならす音がして、チトセさんが出てきました。

そして既に用意が済んでいる机を見て、申し訳なさそうな顔をします。

「すみません。こいつもここまで運んでいただいて」

朝とは打つて変わつて丁寧な口調で言いました。

正確に言つと、いつもは丁寧な口調なのですが、主に陛下のことをついて頭に血が上つてゐる時に、口が悪くなるようです。

次いでチトセさんは中年女性の方にも頭を下げました。

「室長もすみませんでした。本来なら下つ端の私が出迎えるべきですのに……」

室長と呼ばれた女性は、ニンニクと笑いながら言いました。

「気にすることはありませんよ。それよりも執筆の方は進んでいますか？」

「はい、おかげ様で」

チトセさんは現在、故郷に伝わる古い書物を、じゅらの言葉で書いているのだそうです。

それも魔力が目覚めてから得た、興味があること限定の記憶力のおかげだと言います。

なんでもあちらで何度も何度も読み返して、一字一句残さず頭に叩き込んできたとか。

それが一つや二つではないところから、驚きです。

もはや執念と言つても過言ではないでしょう。

彼女はそれを仕事の休憩時間や就寝前を利用して、少しづつ書き溜めています。

いずれこちらの世界全土に普及させることだが、彼女の野望なのだと思います。

城の片隅の書庫準備室で、魔王陛下と宰相閣下と書庫室長とその部下が、仲良く机を囲んでお茶しているなど、誰が想像出来るでしょう。

他国の者が見れば、異質な光景だと言つでしょうね。
しかし魔族の上層部ともなると、あまりに長生きな為か、細かいことはどうでも良くなるみたいですね。

今の所、巣鳳をしているという声も上がっていません。
書庫に回された予算が、今まで通りだからかも知れませんけれどね。

「美味しいですね、このサバンナ」

「チトセ、ハバンナだよ」

「……一文字しか間違つてないじゃないですか」

「チトセ、間違いを指摘されたら、素直に受け止めることが大事ですよ」

「う。はい、室長」

どうやらチトセさんは室長を尊敬しているらしく、彼女の言つことには素直に聞きます。

にこにこ笑いながらチトセさんはひよりかいをお出しになられている陛下をご覧になつて、

閣下はかすかに眉間のしわが薄れています。

何だかんだ仰つても、閣下は陛下の幸せを一番願つてゐるのです。
室長もじやれあつて、見えてる陛下とチトセさんを、温かい目で見守っています。

「いつも申していることですが、いちこかひらまで来られなくていいんですよ。休憩時間も忙しくて、じつせお粗手出来ないんですから」

遠回しかつ丁寧に、来られると迷惑であるところ意味合いで込めて、チトセさんが言つます。

それに対しても陛下は、子どものように口を尖らせて返されました。
「また敬語になって。使わなくていいって言っているのに。僕はチ
トセに会いたいから来ているだけだよ？ 邪魔しないように大人し
く部屋の隅から、チトセを見ているじゃないか。それでも駄目なの
？」

「駄目です。気になります」

天下の魔王陛下が部屋の片隅で膝を抱えて座りながら、じいっとこ
ちらをご覧になっている様子を想像してみてください。気にするな
と言われても、ものすごく気になりますよね？

「だつて僕から会いに行かないと、チトセは僕の所に来てくれない
よね」

「行く必要がありませんからね」

「会いたいと思わない？」

「は？ 誰ですか？」

「僕に」

にっこりとお笑いになる陛下に、チトセさんもこっこりと笑い返し
て言いました。

「思いません」

「チトセのいけず」

「……抱きつかないでいただけませんか？ へ・い・か？」

「反応が冷たい……」

隣の席のチトセさんを抱きしめられたまま、陛下は意氣消沈してら
っしゃいます。

チトセさんはと言いますと、そんな陛下を無視して、普通にハバン
ナを食べています。

まともに相手をすると余計に疲れるから、とはチトセさんの談です。

「あらあら、仲良しさんねえ」

「室長、これのどこが仲良しに見えるんですか？」

ウンザリした声を上げるチトセさん。

「見えるわよ。そういませんか？」

陛下

「いや……それは……何とも言えんな……」

ふふと笑いながら同意を求める室長と、同意すんじゃねえぞと田で訴えるチトセさん、チトセさんの首筋に顔を埋めつつ、横田で圧力をかける陸下に挟まれて、閣下は適当にお茶を濁しました。

どちらに転んでも、面倒になることは明白ですからね。

まあ、大体、こんな感じで毎日のお茶会は開かれています。

夕餉を終えた閣下は、田記に今日あつたことを、つらつらとお書きになります。

初めて城に上がった時からつらつらしゃるので、すでにその冊数は数百冊に及んでいます。

その一頁、一頁に、思い出がたくさん詰まっているのです。時折その田記を読み返して、ああ、そんなこともあつたのだなあと懐かしく思われます。

特にチトセさんが来た辺りから、賑やかな出来事が続いています。心労も多いですが、楽しいこと、嬉しいこともまた多いのです。田記を書き終えた閣下は、明日の仕込みをして、ご就寝なさいます。今日も寂しい一人寝です。

お休みなさいませ、閣下。

どうぞ、よい夢を。

そしてまた明日一日、頑張つてくださいましね。

わて、閣下の一日はいかがでしたでしょうか？

意外と普通？

まあ、人生なんてそんなものですよ。

あまり劇的なものを求め過ぎると、田先の幸せを逃してしまいますからね。

皆さんも「注意ください」。

そんな。余計なお世話だなんて仰らぎに。ね？

そして毎度の「注意ですが、閣下他の心の声などは、わたくしたち

の想像に過ぎません。

本心とは著しくことなる場合もあります。そのことをじつかりと
ご留意ください。

今日の「本日の閣下」は、わたくし、『敬愛する閣下を温かい目で
見守り続ける会』、会員番号一〇七、シユパンネット＝タカタがお
送り致しました。

明日は会員番号一八六、ベルヘゾン＝ツーハンがお送りします。
お楽しみに！（大嘘）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8735b/>

あたしの弟は魔王サマ！？

2010年10月16日05時53分発行